

社 会

(地理的分野)

発行者			教科書の記号・番号	判型 総ページ数	検定済年
番号	名称	略称			
2	東京書籍	東 書◆	地理 701	A B 302	令和2年
17	教育出版	教 出◆	地理 702	A B 308	
46	帝国書院	帝 国◆	地理 703	A B 310	
116	日本文教出版	日 文◆	地理 704	A B 298	

※「発行者 略称」欄にある◆は、「学習者用デジタル教科書」（学校教育法第34条第2項に規定する教材）の発行予定があることを示しています。

1 調査の対象となる教科書の冊数と発行者

冊数	発行者の略称
4冊	東書、教出、帝国、日文

2 学習指導要領における教科・分野の目標等

【社会科の目標】

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情、国民権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

【地理的分野の目標】

社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の国土及び世界の諸地域に関して、地域の諸事象や地域的特色を理解するとともに、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 日本や世界の地域に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとする大切さについての自覚などを深める。

【参考：中学校学習指導要領解説 社会編「第1章 総説 2 社会科改訂の趣旨及び要点」から抜粋】

(2) 改訂の要点

〔地理的分野〕

地理的分野における改訂の要点は、主に次の5点である。

ア 世界と日本の地域構成に関わる内容構成の見直し

「世界と日本の地域構成」については、従前の「世界の様々な地域」、「日本の様々な地域」の二つの大項目からなる内容構成を見直し、両大項目の最初に置かれた「世界の地域構成」、「日本の地域構成」を統合して新たな大項目を設け、それを地理的分野の学習の冒頭に位置付けることとした。

この「世界と日本の地域構成」を学習の冒頭に位置付けたのは、世界及び日本の地域構成

に関する学習を関連付け、世界と日本の地理的認識の座標軸を形成することを意図したものである。また、そこでの学習で小学校の地理的な学習内容を振り返るとともに、地図の読図や作図などの地理的技術の基本を身に付けることによって、地理学習の楽しさや有用性を確認することができ、その後の「世界の様々な地域」、「日本の様々な地域」の学習を円滑に展開し、地理的技術の育成の一層の充実を達成するよう意図したものである。

イ 地域調査に関わる内容構成の見直し

地域調査については、従前の世界の様々な地域又は国を対象とする「世界の様々な地域の調査」、生徒の生活舞台を対象とする「身近な地域の調査」という、対象地域によって異なる二つの中項目からなる内容構成を見直し、生徒の生活舞台を主要な対象地域とした、観察や野外調査、文献調査などの実施方法を学ぶ「地域調査の手法」と、地域の将来像を構想する「地域の在り方」の二つの中項目に分け、再構成することとした。

このことは、対象地域のスケールの違いによって項目を分けるのではなく、技能の習得を中心とする学習と、地域の地理的な課題の解決を中心とする学習との目的の違いによって項目を分けることで、学習のねらいを明確にし、その確実な実施を意図したものである。

ウ 世界の諸地域学習における地球的課題の視点の導入

今回の改訂では、中央教育審議会答申の中で、「持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育てていくことが求められ」ている。また、学校教育法の義務教育の目標の中に示された、「進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」については、その重要性はますます高まってきている。

そこで、グローバル化が引き続き進展し、また環境問題等の地球的課題が一層深刻化する現状においては、世界の諸地域の多様性に関わる基礎的・基本的な知識を身に付け、世界全体の地理的認識を養うとともに、世界各地で見られる地球的課題について地域性を踏まえて適切に捉えることが大切であることから、地球的課題の視点を「世界の諸地域」における追究の視点として位置付けることを意図したものである。

エ 日本の諸地域学習における考察の仕方の柔軟化

中学校社会科の地理的分野学習の中心であった日本の諸地域に関する学習は、平成20年改訂によって、日本全体について任意に地域区分した上で、各地域の特色ある事象を中核に、それを他の事象と有機的に関連付けて地域的特色を捉えることとなった。今回もこの趣旨を継承し、項目ごとに羅列的な扱いに陥ることのないよう、また、学習する地域に関する事実的な知識を覚えることのみならず主眼が置かれることのないよう、考察の仕方に重点を置いた「日本の諸地域」学習を引き継ぐこととした。

その際、平成20年改訂では、指定された七つの考察の仕方に対して、七地方区分された日本各地域を当てはめるという組合せが一般的であったが、このたびは適切に地域区分された日本の各地域を前提に、その地域的特色を捉えるのに適切な考察の仕方を、指定された四つの考察の仕方、あるいは必要に応じて中核となる事象を設定する考察の仕方を、適宜選択して組み合わせる結び付けるようにした。このことによって、地域的特色を明らかにするための中核となる事象を、従前よりも柔軟に設定することができ、諸地域の単なる地誌的な知識の習得に偏重した学習に陥ることなく、より動態地誌的な考え方の趣旨に沿った展開ができるよう意図したものである。

オ 日本の様々な地域の学習における防災学習の重視

平成20年改訂以降、未曾有の災害である東日本大震災を経て、なお継続する地震被害、さらに全国各地で生起する台風や集中豪雨等による河川の決壊、土砂崩れなど、頻発する自然災害に対応した人々の暮らしの在り方を考えることは、我が国で生活する全ての人々にとって欠くことのできない「生きる力」である。

そこで、大項目「日本の様々な地域」にあっては、それを構成する四つの中項目を通して、

我が国の自然災害や防災の実態などを踏まえた学習が可能となるように、適宜、自然災害やそこでの防災の事例が取り上げられるような構成としている。例えば、「日本の地域的特色と地域区分」では、その前提となる日本全体としての自然環境、自然災害、防災の取組の概観を、「日本の諸地域」では地域レベルでのそれらの具体的な特色を、さらに「地域調査の手法」、「地域の在り方」では、調査手法、地域構想のいずれに視点を置くかの違いはあるものの、いずれの学習においても事例対象として生徒の生活圏における自然災害や防災を取り上げ、学習を深めることが可能となるよう意図したものである。

3 教科書の調査研究

(1) 内容

ア 調査研究の総括表（調査結果は「別紙1」）

調査研究項目（調査研究の対象）	対象の根拠（目標等）	数値データの単位
a 「a 世界と日本の地域構成」内容ごとのページ数と割合	地理・目標(1) 分野の改訂の要点 ア	ページ数、%
b 「b 世界の様々な地域」内容ごとのページ数と割合	地理・目標(1)	ページ数、%
c 「c 日本の様々な地域」内容ごとのページ数と割合	地理・目標(1) 分野の改訂の要点 イ	ページ数、%
d 「b-イ 世界の諸地域」各州において取り上げている州内の国の数	地理・目標(1) 分野の改訂の要点 ウ	箇所
e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域の数	地理・目標(3) 分野の改訂の要点 イ	箇所
f 東京に関する地理的事象を取り上げている箇所数	地理・目標(3)	箇所
g 発展的な内容を取り上げている箇所数	中学校学習指導要領総則	箇所

イ 調査項目の具体的な内容（調査結果は「別紙2」）

① 調査項目の具体的な内容の対象とした事項

調査研究事項のb～gとの関連で、次の事項について具体的に調査研究する。

b 「b 世界の様々な地域」における「イ 世界の諸地域」で扱っている主題
(別紙2-1)

c 「c 日本の様々な地域」における「ウ 日本の諸地域」で扱っている考察の仕方
(別紙2-2)

d 「b-イ 世界の諸地域」で取り上げている州別国名 (別紙2-3)

e 「c-エ 地域の在り方」において取り上げている地域名と内容 (別紙2-4)

f 東京に関して取り上げている地理的事象 (別紙2-5)

g 発展的な内容の扱い

< 調査の結果、gについては記載の無いことを確認した。 >

<その他>

* 1 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱い (別紙2-6)

* 2 国旗・国歌の扱い (別紙2-7)

* 3 北朝鮮による拉致問題の扱い

< 調査の結果、* 3については記載の無いことを確認した。 >

* 4 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱い (別紙2-8)

* 5 一次エネルギーや再生可能エネルギーの扱い (別紙2-9)

* 6 持続可能な社会づくりの扱い (別紙2-10)

* 7 オリンピック・パラリンピックの扱い（別紙2-11）

② 調査対象事項を設定した理由等

- ・ 地理的分野の学習では、社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することをねらいとしている。概括的な調査研究で取り上げた地域や事例・事象等のうち、学習の対象となった地域やその学習内容・方法を調査することにより、各社の方針を明確にする。（a、b、c、d、e）
- ・ 教育基本法と学校教育法においては、共に「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が明記されている。地理的分野の学習において、「地域に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度」、「地域の実態や課題解決のための取組」の理解、地域で見られる「地理的な課題について多面的・多角的に考察、構想し、表現する」力の育成を重視するため、地域の在り方で取り上げている地域名と内容や東京に関して取り上げている地理的事象を調査する。（e、f）
- ・ 発展的な内容については、中学校学習指導要領 第1章 総則「第2 教育課程の編成 3 教育課程の編成における共通事項 (1) 内容等の取扱い イ」において、「学校において特に必要がある場合には、第2章以下に示していない内容を加えて指導することができる。」と示されている。また、「(3) 指導計画の作成等に当たっての配慮事項 イ」では、「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること」と示されている。これらのことから、発展的な内容の扱いの有無、取り上げている内容の具体的な学習の内容について調査する。（g）
- ・ 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについては、中学校学習指導要領 第2章 第2節社会 3 内容の取扱いでは、「領域の範囲や変化とその特色」において、「我が国の海洋国家としての特色を取り上げるとともに、竹島や北方領土が我が国の固有の領土であることなど、我が国の領域をめぐる問題も取り上げるようにすること。その際、尖閣諸島については我が国の固有の領土であり、領土問題は存在しないことも扱うこと。」とあることから、我が国の領域をめぐる問題について正しく理解できるようにするため、北方領土、竹島、尖閣諸島に関する記述の概要を調査する。（*1）
- ・ 国旗・国歌については、学習指導要領に基づき、国旗・国歌に対する正しい認識をもたせ、それらを尊重する態度を育てることが大切であることから、その扱いについて調査する。（*2）
- ・ 東京都教育委員会教育目標の基本方針1「人権尊重の精神と社会貢献の精神の育成」を掲げ人権教育を推進してきた観点から、児童・生徒が人権尊重の理念を正しく理解できるようにするため、北朝鮮による拉致問題の扱いについて調査する。（*3）
- ・ 東京都では、自然災害における被害を最小化し、首都機能の迅速な復旧を図る総合的なリスクマネジメント方策の確立が喫緊の課題であり、防災教育の普及等により地域の防災力の向上が重要であることから、防災や自然災害における関係機関の役割等について考察させることを通じて、これらの問題を正しく理解できるようにするため、防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱いについて調査する。（*4）
- ・ 学習指導要領に基づき、環境にかかる諸問題を考察させることを通じて、これらの問題を正しく理解できるようにするため、一次エネルギーや再生可能エネルギーの扱いについて調査する。（*5）
- ・ 生徒には、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される。学習指導要領に基づき、正しい理解ができるように、持続可能な社会づくりの扱いについて調査す

る。(＊6)

- ・ 東京都教育委員会教育目標の基本方針2・3に基づき、文化・スポーツに親しみ、国際社会に貢献できる日本人を育成するという観点から、オリンピック・パラリンピックの扱いについて調査する。(＊7)

③ 調査研究の方法

- b 「世界の諸地域」で扱っている主題を州ごとに記述する。
- c 「日本の諸地域」で扱っている考察の仕方を地域ごとに記述する。
- d 「世界の諸地域」で取り上げている国名を州ごとに整理する。
- e 「地域の在り方」において取り上げている地域名と内容について整理する。
- f 東京に関する地理的事象を取り上げている項目を整理する。

<その他>

- * 1 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。
- * 2 国旗・国歌について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 3 北朝鮮による拉致問題の扱いについて取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 4 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱いについて取り上げている項目を調査する。
- * 5 一次エネルギーや再生可能エネルギーについて取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- * 6 持続可能な社会づくりについて取り上げている項目を調査する。
- * 7 オリンピック・パラリンピックについて取り上げている項目及び記述の概要を調査する。

(2) 構成上の工夫 (調査結果は「別紙3」)

以下の観点について、箇条書きで記述する。

- ア 冊子の構成
- イ 学習過程
- ウ 学習活動
- エ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫
- オ ユニバーサルデザインの視点
- カ デジタルコンテンツの扱い

項目	全体のページ数、内容ごとのページ数と割合										計	d 「b-1」世界の諸地域」各州において取り上げている州内の国の数						e いて取り上げている地域の数	f 上げている地理的事象を取り	g 所発的な内容を取り上げている箇所数		
	a 「世界と日本の地域構成」内容ごとのページ数と割合(上段：ページ数、下段：%)		b 「世界の様々な地域」内容ごとのページ数と割合		c 「日本の様々な地域」内容ごとのページ数と割合				b			c		北アメリカ	南アメリカ	計						
	ア	イ	ア	イ	ア	イ	ウ	エ	計	ア		イ	ア				イ				オセアニア	ヨーロッパ
発行者	14	13	27	21	86	107	16	27	87	12	142	276	47	16	45	54	23	12	197	3	104	0
東書	51.9%	48.1%	100.0%	19.0%	80.4%	100.0%	11.3%	19.0%	61.3%	8.5%	100.0%	100.0%	9.8%	38.8%	51.4%	23	12	197	3	104	0	
教出	11	8	19	19	86	105	14	26	101	8	149	273	47	16	45	54	23	12	197	10	103	0
帝国	57.9%	42.1%	100.0%	18.1%	81.9%	100.0%	9.4%	17.4%	67.8%	5.4%	100.0%	100.0%	7.0%	38.5%	54.6%	23	12	197	10	103	0	
日	12	12	24	21	83	104	12	28	115	11	166	294	34	6	34	33	10	9	126	3	118	0
文	50.0%	50.0%	100.0%	20.2%	79.8%	100.0%	7.2%	16.9%	69.3%	6.6%	100.0%	100.0%	8.2%	35.4%	56.5%	10	9	126	3	118	0	
平均値	11	11	22	20	75	95	20	25	100	11	156	273	36	7	39	24	5	8	119	3	86	0
平均値	50.0%	50.0%	100.0%	21.1%	78.9%	100.0%	12.8%	16.0%	64.1%	7.1%	100.0%	100.0%	8.1%	34.8%	57.1%	5	8	119	3	86	0	
平均値	12.0	11.0	23.0	20.3	82.5	102.8	15.5	26.5	100.8	10.5	153.3	279.0	41.0	11.3	40.8	41.3	15.3	10.3	159.8	4.8	102.8	0.0

a 「世界と日本の地域構成」内容ごとのページ数と割合については、各社の教科書の目次から各項目のページ数を算出した。
 b 「世界の様々な地域」内容ごとのページ数と割合については、各社の教科書の目次から各項目のページ数を算出した。
 c 「日本の様々な地域」内容ごとのページ数と割合については、各社の教科書の目次から各項目のページ数を算出した。
 d 「b-1」世界の諸地域」で取り上げている州内の国の数については、各社の該当項目で取り上げている「地域の在り方」の事例地の数を数えた。
 e 「c-1」地域の在り方」において取り上げている地域の数は、各社の該当項目で取り上げている「地域の在り方」の事例地の数を数えた。
 f 「東京に関する地理的事象を取り上げている箇所数」は、各社の教科書で東京に関わる地理的事象を取り上げている箇所数を数えた。
 g 「発展的な内容を取り上げている箇所数」は、発展的な内容を取り上げている箇所数を数えた。
 ※ 集計について、四捨五入しているため、合計が100%にならない項目がある。

「別紙2-1」 【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 「b 世界の様々な地域」における「イ 世界の諸地域」で扱っている主題】

発行者	アジア	オセアニア	ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	南アメリカ
東書	急速な都市の成長と変化 (人口・居住・都市の問題)	強まるアジアとの結び付き (多文化社会の形成の問題)	国どうしの統合による変化 (国家間の統合の問題)	国際的な支援からの自立に向けて (食料生産や経済発展での支援の問題)	多くの人々を引きつける地域 (地域格差の問題)	開発の進展と環境問題 (環境保全と開発の問題)
教出	多様なアジアの経済発展 (人口問題)	オセアニアと他地域との関係についての、歴史的な背景 (多民族の共存の問題)	強まる結びつき (環境問題)	アフリカの現状と課題の解決に向けた動き (人口・食料問題)	さまざまな産業が盛んな理由 (多民族の共存の問題)	開発やそれにともなう生活の変化 (環境問題、都市問題)
帝国	急速な経済成長 (都市・居住問題)	他地域との関係 (多文化の共生)	国どうしの結び付きの強まり (経済格差)	特定の産物に頼る経済 (食料問題)	巨大な産業 (生産と消費の問題)	農地や鉱山の開発 (熱帯林の破壊)
日文	人口や経済発展 (経済発展の地域格差や都市問題)	多文化が共生する社会 (多様な民族の共生)	国境をこえた統合 (統合のおかげで進む分離の動き)	自立のための開発と国際協力 (モノカルチャー経済からの自立)	世界に影響をあたえる産業 (大量生産・大量消費の生活スタイル)	開発と環境保全 (熱帯雨林の伐採による環境破壊)

【別紙2-2】 【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 〇「日本の様々な地域」における「ウ 日本の諸地域」で扱っている考察の仕方】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	ア 北海道地方	イ 東北地方	ウ 関東地方	エ 中部地方	オ 近畿地方	カ 中国・四国地方	キ 九州地方
東書	自然環境	その他の事象 (生活・文化)	交通や通信	産業	人口や都市・村落	交通や通信	自然環境
教出	自然環境 産業	その他の事象 (伝統文化と地域の 変化)	交通や通信	産業	その他の事象 (地域の歴史的な背 景や移り変わり)	人口や都市・村落	自然環境
帝国	自然環境	その他の事象 (生活・文化)	人口や都市・村落	産業	その他の事象 (環境保全)	交通や通信	自然環境
日文	自然環境	その他の事象 (持続可能な社会づ くり)	交通や通信	産業	その他の事象 (歴史的背景)	人口や都市・村落	自然環境

考察の仕方を記述 (自然環境、人口や都市・村落、産業、交通や通信、その他の事象)

【別紙2-3】 (1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 d 「b-イ 世界の諸地域」で取り上げている州別国名】

発行者	アジア	オセアニア	ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	南アメリカ		
東 書	アゼルバイジャン アフガニスタン アラブ首長国連邦 アルメニア イエメン イスラエル イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カザフスタン カタール カンボジア キプロス キルギス クウェート サウジアラビア ジョージア シリア シンガポール スリランカ タイ 大韓民国	オーストラリア キリバス クック諸島 サモア ソロモン諸島 ツバル トンガ ナウル ニウエ ニュージーランド バヌアツ パプアニューギニア パラオ フィジー マーシャル諸島 ミクロネシア連邦	アイスランド アイルランド アラルビア アンドラ イギリス イタリヤ ウクライナ エストニア オランダ オーストラリア 北マケドニア ギリシャ クロアチア コンボ サンマリノ スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア セルビア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー	アルジェリア アンゴラ ウガンダ エジプト エスワティニ エチオピア ガナ カーボベルデ ガボン カメルーン ガンビア ギニア ギニアビサウ ケニア コートジボワール コモロ コンゴ共和国 コンゴ民主共和国 サントメ・プリンシペ シエラレオネ ジブチ ジンバブエ ジンダン	赤道ギニア セーシェル セネガル ソマリア タンザニア チャド 中央アフリカ チュニジア トーゴ ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ブルンジ ベナン ボツワナ マダガスカル マラウイ マリ 南アフリカ共和国 南スーダン モーリシャス モーリタニア モザンビーク モロッコ	アメリカ合衆国 アンティグア・バーブーダ エルサルバドル カナダ キューバ グアテマラ グレナダ コスタリカ ジャマイカ セントクリストファー・ネービス セントビンセント及びグレナディーン諸島 セントトマル ドミニカ共和国 ドミニカ国 トリニダード・トバゴ ニカラグア ハイチ パナマ バハマ バルバドス ベリーズ ホンジュラス メキシコ	アルゼンチン ウルグアイ エクアドル ガイアナ コロンビア スリナム チリ パラグアイ ブラジル ペネズエラ ペルー ボリビア	
	教 出	アゼルバイジャン アフガニスタン アラブ首長国連邦 アルメニア イエメン イスラエル イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カザフスタン カタール カンボジア キプロス キルギス クウェート サウジアラビア ジョージア シリア シンガポール スリランカ タイ 大韓民国	オーストラリア キリバス クック諸島 サモア ソロモン諸島 ツバル トンガ ナウル ニウエ ニュージーランド バヌアツ パプアニューギニア パラオ フィジー共和国 マーシャル諸島 ミクロネシア連邦	アイスランド アイルランド アラルビア アンドラ イギリス イタリヤ ウクライナ エストニア オーストリア オランダ 北マケドニア ギリシャ クロアチア コンボ サンマリノ スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア セルビア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー	アルジェリア アンゴラ ウガンダ エジプト エスワティニ エチオピア ガナ カーボベルデ ガボン カメルーン ガンビア ギニア ギニアビサウ ケニア コートジボワール コモロ コンゴ共和国 コンゴ民主共和国 サントメ・プリンシペ シエラレオネ ジブチ ジンバブエ ジンダン	赤道ギニア セーシェル セネガル ソマリア タンザニア チャド 中央アフリカ チュニジア トーゴ ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ブルンジ ベナン ボツワナ マダガスカル マラウイ マリ 南アフリカ共和国 南スーダン モーリシャス モーリタニア モザンビーク モロッコ	アメリカ合衆国 アンティグア・バーブーダ エルサルバドル カナダ キューバ グアテマラ グレナダ コスタリカ ジャマイカ セントクリストファー・ネービス セントビンセント及びグレナディーン諸島 セントトマル ドミニカ共和国 ドミニカ国 トリニダード・トバゴ ニカラグア ハイチ パナマ バハマ バルバドス ベリーズ ホンジュラス メキシコ	アルゼンチン ウルグアイ エクアドル ガイアナ コロンビア スリナム チリ パラグアイ ブラジル ペネズエラ ペルー ボリビア

【別紙2-3】 (1) 内容 d 「b-1」 世界の諸地域で取り上げている州別国名】

発行者	アジア	オセアニア	ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	南アメリカ	
帝国	アフガニスタン アラブ首長国連邦 イエメン イラク イラン インド インドネシア ウズベキスタン オマーン カタール カンボジア クウェート サウジアラビア シリア シンガポール スリランカ タイ 大韓民国 中国 朝鮮民主主義人民共和国 トルクメニスタン トルコ 日本 ネパール	オーストラリア クック諸島 ツバル ニュージーランド パプアニューギニア フィジー	アイスランド アイルランド イギリス イタリア ウクライナ エストニア オーストリア オランダ キプロス ギリシャ クロアチア スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア セルビア チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー ハンガリー フィンランド フランス ブルガリア	アルジェリア アンゴラ ウガンダ エジプト エチオピア ガーナ カボネ カメルーン キニア ケニア コートジボワール コンゴ共和国 コンゴ民主共和国 ザンビア ジンバブエ スーダン セネガル タンザニア チャド チュニジア ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ボツワナ	マダガスカル マラウイ マリ 南アフリカ共和国 南スーダン モーリタニア モロッコ リビア	アメリカ合衆国 カナダ キューバ グアテマラ コスタリカ ジャマイカ ドミニカ共和国 ハイチ パナマ メキシコ	アルゼンチン エクアドル コロンビア チリ パラグアイ ブラジル ペネズエラ ペルー ボリビア
日文	日本 ネパール バレーン パキスタン バングラデシュ フィリピン メトナム ミャンマー モンゴル ヨルダン	オーストラリア ソロモン諸島 ツバル ニュージーランド パプアニューギニア フィジー	アイスランド アゼルバイジャン アルメニア イギリス イタリア ウクライナ エストニア オランダ オーストリア キプロス ギリシャ クロアチア ジョージア スイス スウェーデン スペイン スロバキア スロベニア タジキスタン チェコ デンマーク ドイツ ノルウェー バチカン市国 ハンガリー	アルジェリア アンゴラ エジプト エチオピア ガーナ カメルーン ケニア コートジボワール コンゴ民主共和国 ザンビア ジンバブエ スーダン セネガル タンザニア ナイジェリア ナミビア ニジェール ブルキナファソ ボツワナ	アメリカ カナダ キューバ パナマ メキシコ	アルゼンチン エクアドル コロンビア チリ パラグアイ ペネズエラ ペルー ボリビア	アルゼンチン エクアドル コロンビア チリ パラグアイ ペネズエラ ペルー ボリビア

「別紙2-4」 【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 e 「c-e 地域の在り方」において取り上げている地域名と内容】
 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	具体的な地域名	具体的な学習の内容
東書 宮崎県宮崎市 石川県金沢市 東京都		1 身近な地域の課題を見つける ・ 地球規模の課題とSDGs ・ 日本の地域的な課題 ・ 宮崎市の課題を見つける 2 課題を調査する ・ どこで起こっているか ・ どのように起こったか ・ 中心市街地の課題 ・ 郊外の課題 3 要因を考察する ・ 課題の影響を考察する ・ 中心市街地の課題の要因と影響 ・ 高齢化の要因と影響 4 解決策を構想する ・ 他地域の取り組みを調べる ・ 地域の課題に合わせて考える ・ 金沢市の中心市街地活性化 ・ 高齢化への対応策 5 地域の将来像を提案する ・ 解決策を提案する方法 ・ 根拠や立場を明確にする ・ 解決策の内容をしばりこむ ・ 解決策を提案する
教出 鳥取県八頭町 徳島県神山町 大阪府堺市 東京都八王子市 東京都稲城市	徳島県上勝町 高知県高知市 兵庫県神戸市 東京都多摩市 東京都町田市	1 地域の課題をとらえる(1) ・ 地域の変化を知ることから ・ 人口減少の国 ・ 人口流出による農村の衰退 ・ 農村の課題と対策 2 地域の課題をとらえる(2) ・ 都市の社会基盤 ・ 人口減少と公共施設 ・ 都市の課題 ・ 災害に強いまちづくり 3 地域の課題を調べる ・ 「高齢化」をキーワードに ・ ニュータウン開発の歴史 ・ 住民へのアンケートから ・ 商店街での聞き取りから 4 地域に向けて発信する ・ 調べたことをまとめる ・ 地域の課題が見えるようにする
帝国 京都府京都市 東京都練馬区 神奈川県鎌倉市		1 課題を把握しよう ・ 各地域でみられた課題を振り返ろう ・ 追究するテーマを決めよう 2 地域をとらえよう ・ 地域の実態を知ろう 3 課題の要因を考察しよう ・ 類似した地域と比べよう ・ 課題の要因を探ろう 4 課題の解決に向けて構想しよう ・ 課題の解決に向けた取り組みを調べよう ・ 課題の解決に向けて構想しよう ・ 構想したことを議論しよう 5 構想の成果を発信しよう ・ 構想したことをまとめよう ・ 社会に向けて発信しよう ・ 持続可能な社会を目指す一員として
日文 京都府京都市 京都府久御山町 長崎県長崎市		1 地域の課題と特色をつかもう ・ 日本全体の課題をふりかえる ・ 調査テーマと調査する地域を決定する 2、3 地域の課題の要因を考察しようー自然と防災班ー ・ 課題に対する取り組みを調査し考察する 2、3 地域の課題の要因を考察しようー交通と観光班ー ・ 課題を多面的にとらえて考察する 4 課題の解決に向けて構想しよう ・ よりよいまちづくりプランを考える 5 まちづくり会議を開こう ・ 会議を開くにあたって ・ 会議を終えて

発行者

- ・小笠原諸島(巻頭2)
- ・国土の広がりや周りの国々(P6)
- ・面積が小さい国とパチカ市国(P13)
- ・緯度と経度(P14-15)
- ・方位の示し方(P16)
- ・緯線と経線が直角に交わった地図(P17)
- ・中心からの距離と方位が正しい地図(P17)
- ・面積が正しい地図(P17)
- ・日本と同緯度、同経度の範囲(P20)
- ・東京からの距離と方位が正しく表されている世界地図(P21)
- ・ロンドン(イギリス)からの距離と方位が正しく表されている世界地図(P21)
- ・1月1日、午前9時の東京とそのときのロンドンとニューヨーク(P22)
- ・12月の午後5時ごろの様子(P22)
- ・時差の調べ方(P23)
- ・工事前と工事後の沖ノ島(P24)
- ・海洋国・日本(P24)
- ・日本の領域と排他的経済水域(P24-25)
- ・日本の南端(P25)
- ・日本の東端(P25)
- ・日本の領域と排他的経済水域(地図)(P25)
- ・竹島、尖閣諸島、北方領土の位置(P26)
- ・三つの国が合わさってきた静岡県(P28)
- ・日本の都道府県と地方(P28)
- ・イカライト(カナタ)と東京の雨温図(P36)
- ・寒帯の分布(P37)
- ・雨温図の読み取り方(P37)
- ・イルケナック(ロシア)と東京の雨温図(P38)
- ・地理にアブナーチ-地図やグラフを使いこなそう(P6-7)
- ・地球善地、33番地(P13)
- ・地球儀と世界地図の違い(P14)
- ・面積が正しい地図(P15)
- ・図の中心からの距離と方位が正しい地図(P15)
- ・角度が正しい地図(P15)
- ・日本と世界で異なる時刻(P20)
- ・ロンドンと東京・ニューヨークの時刻と位置の関係(P21)
- ・イギリスを基準とした世界の等時帯を表した図(P21)
- ・面積が拡大した西之島(P22)
- ・日本の最南端をめぐる問題(P23)
- ・日本の都道府県と七地方区分(P26)
- ・明治時代の初め(1871年)(P26)
- ・都道府県行所在地と成り立ち(P27)
- ・世界の気候帯の分布(P30)
- ・気温と降水量のグラフ(P31)
- ・温帯の自然環境(P37)
- ・アジア州の地勢と国々(P50)
- ・シンガポールはいま一熱帯にある都市国家(P64)
- ・日本の世界遺産の分布(P132)
- ・地域区分をしてみよう(P148)
- ・地域の結びつきによる区分(P149)
- ・日本の人口密度の分布(P164)
- ・三大都市圏への人口集中(P164)
- ・東京圏・大阪圏への人口移動(P164)
- ・都市への人口移動(P164)

東 書

- ・冷帯(亜寒帯)の分布(P39)
- ・ローマ(イタリア)と東京の雨温図(P40)
- ・温帯の分布(P41)
- ・ニアメ(ニジェール)と東京の雨温図(P42)
- ・乾燥帯の分布(P43)
- ・アビア(サモア)と東京の雨温図(P44)
- ・熱帯の分布(P45)
- ・スココ(ペルー)と東京の雨温図(P46)
- ・高山気候の分布(P47)
- ・世界の気候区分(P48)
- ・アジア州の自然(P57)
- ・アジアン教と人々の暮らし(P70)
- ・イスラム教と人々の暮らし(P70)
- ・日本がどのような国かイメージしよう(P156-157)
- ・丘の斜面に広がる町(P156)
- ・ふだんの多摩川河川敷と大雨のときの様子(P159)
- ・日本の主な川と平野、盆地(P160)
- ・海洋国・日本(P161)
- ・アテネ、ロンドン、東京の雨温図(P162)
- ・地域によって異なる日本の気候(P163)
- ・建てかえの進む多摩ニュータウン(P168)
- ・日本の人口密度(P168)
- ・人口構成や分布の変化(P168-169)
- ・三大都市圏への人口集中(P168)
- ・東京圏・大阪圏への人口の移動(P169)
- ・電気自動車の充電スタンド(P171)
- ・大都市圏に集中する商業・サービス業(P173)
- ・第三次産業就業率の県別割合(P173)
- ・日本の工業地帯・工業地域と出荷額の割合(P169)
- ・第三次産業とその立地(P169)
- ・国境を越えて行き来する人や物(P170)
- ・日本の高速交通網の移り変わり(P171)
- ・九州地方の位置(P176)
- ・気候を農業に生かす工夫(P180)
- ・軍都と原爆、そして復興(P192-193)
- ・交通手段の多様化(P199)
- ・基盤の目的による街並み(P206)
- ・日本の工業地帯・地域の生産割合の変化(P208)
- ・那珂川の年間降水量別に占める東京都・大阪府・愛知県の割合の变化(P210)
- ・琵琶湖の水の利用(P212)
- ・特徴ある三つの地域の産業(P219)
- ・主な工業地帯・工業地域の生産額の割合(P220)
- ・日本の主な工場産業の分布(P227)
- ・関東地方(P230-231)
- ・まぐろの競りを見学する(P231)
- ・東京駅と通勤する人々(P231)
- ・東京の市街地から広がる関東平野(P232)
- ・日本の首都 東京(P232)
- ・日本最大の平野(P232-233)
- ・関東ローマ(P232)
- ・関東地方の地勢と各都県(P233)
- ・内陸と海沿いで異なる気候(P233)
- ・イルカウォッシングを楽しむ観光客(P233)
- ・国の省庁などの機関の多くが集まっている都心(P234)
- ・首都としての役割(P234)
- ・副都心の発達(P234-235)

教 出

- ・さまざまな交通手段が見られる東京(P174)
- ・移動における路線と航空機の利用の割合(P174)
- ・日本の高速交通網(P175)
- ・東京・大阪間の移動時間の変化(P175)
- ・交通・大塚間に着目して地域区分しよう(P177)
- ・東京との鉄道での移動時間(P177)
- ・東京圏への移動手段(P177)
- ・日本の地域的特色を伝えよう(P178-179)
- ・中小企業の工場が多く集まる東大塚市(P213)
- ・東京都中央卸売市場に上荷するレタスの量(P226)
- ・東京都中央卸売市場への所要時間の変化(P229)
- ・関東地方-さまざまな地域と結びつく人々の暮らし(P233)
- ・交通網や通信施設が集中する東京(P233)
- ・通勤・通学時間帯の新宿駅(P233)
- ・各地の雨温図(P234)
- ・関東地方の地形と気候(P234-235)
- ・関東地方の人口と産業(P235)
- ・日本の交通と通信の中心・東京(P235)
- ・関東地方の人口(P235)
- ・旅客数が多い国内の航空路線(P235)
- ・日本の中心都市・東京(P236)
- ・世界都市・東京(P236-237)
- ・東京圏への集中(P236)
- ・世界への玄関口の関東地方(P237)
- ・官庁街と国会議事堂(P237)
- ・東京都港区における外国大使館の分布(P237)
- ・都道府県別の在留外国人人口の割合(P237)
- ・東京都と関東地方への集中(P234)
- ・都心の人口の変化(P235)
- ・東京の中心部に集中する施設(P235)
- ・日本国内の主な航空路線と旅客数(P235)
- ・東京周辺の昼間と夜間の人口(P235)
- ・東京湾の臨海部の再開発(P235)
- ・郊外に広がる市街地(P236)
- ・市街地拡大にともなう問題(P236-237)
- ・東京大都市圏にみる地価の比較(P236)
- ・新都心の開発(P237)
- ・鉄道に沿って拡大する東京大都市圏の市街地(P237)
- ・東京23区への通勤・通学者の分布(P237)
- ・災害に強い都市を自として(P237)
- ・長距離通勤をする、横浜質屋に住む中野さん(P237)
- ・沿岸部の工業地域(P238)
- ・高い技術で精巧な金属加工を行う工場(P238)
- ・大都市と結びついた農業(P239)
- ・関東地方における工業都市の分布(P239)
- ・ブルーベリー狩りを楽しむ観光客(P239)
- ・大勢の人でにぎわうエスニックタウン(P240)
- ・世界の中の東京(P240)
- ・国際的な交通の拠点(P240-241)
- ・日本の主な港の貿易額(P240)
- ・増加する外国人(P241)
- ・関東地方の主な港の貿易品目(P241)
- ・関東地方・東京都に暮らす外国人の割合(P241)
- ・情報を生かした産業界(P241)
- ・都市特有の課題について考える-東京都を例に(P242)
- ・東京23区の昼間人口(P238)
- ・東京大都市圏の拡大(P238)
- ・通勤・通学圏の広がりと課題(P238-239)
- ・職場までの遠い道のり(P238)
- ・東京周辺の地価と鉄道網(P239)
- ・東京23区への通勤・通学者(P239)
- ・充実した観光産業(P239)
- ・多くの外国人観光客が訪れる浅草(P239)
- ・東京を訪れる外国人観光客の移り変わり(P239)
- ・関東地方の工業地域の広がりが(P240)
- ・東京都中央卸売市場に上荷する野菜の県別割合(P241)
- ・多数の「船宅難民」が生まれた理由を考えよう(P242)
- ・オリンピック・パラリンピックと東京(P244)
- ・「TOKYO2020」に向けて建設が進む新国立競技場(P244)
- ・開発が進む東京の臨海部(P244)
- ・1964年の大会に合わせて開催したモノレール(P244)
- ・NPOを設立して、東北地方を活性化させる「イベント」を企画しよう(P254)
- ・大規模化する畑作や酪農(P262-263)
- ・コンビニエンスストアの配達の様子(P277)
- ・東京都とコンビニエンスストアとの協定(P277)
- ・「風の運」に配慮した開業(P242)
- ・東京メトロ南砂町駅入口(P242)
- ・ユネスコに登録された日本の無形文化遺産の分布(P251)
- ・やませを利用する(P254)
- ・地域の課題をみる(P274)
- ・人口流出による農村の衰退(P275)
- ・都市の課題(P276-277)
- ・多摩ニュータウンの公園(P278)
- ・建て替えられた高層マンション(P278)
- ・「高齢化」をキーワードに(P278)
- ・ニュータウン開業の歴史(P278)
- ・多摩市の人口の変化(P278)
- ・住民へのアンケートから(P279)
- ・移動販売車を利用する(P279)
- ・住宅団地の室内(P279)
- ・住宅団地の解体作業(P279)
- ・自動運転バスの走行実験(P279)
- ・身近な地域の様子をもとめたイラストマップ(P280)
- ・さくらさんがまとめたポストター(P281)

発行者	東京に関する地理的事象を取り上げている項目	地理的分野
<ul style="list-style-type: none"> ・地理的な見方・考え方について(巻頭7) ・地球の地球儀とその表面を切り開いて平面にした地図(P10) ・緯線と経線が直角に交わる地図(P11) ・面積が正しい地図(P11) ・中心からの距離と方位が正しい地図(P11) ・日本と同じ緯度、同じ経度の範囲(P14) ・初詣で混雑する神社(P16) ・東京が1月1日午前0時のときに北極の真上から見た地球(P16) ・時差の調べ方(P17) ・日本の東端(P18) ・日本の南端(P18) ・海の資源の利用と排他的経済水域(P19) ・離岸工事によって守られた沖ノ鳥島(P19) ・活発な噴火を続ける西之島(P19) ・都道府県の成り立ち(P22) ・鳥栖県のアンテナショップ(P22) ・東京都の都庁所在地は「東京」？(P23) ・世界の気候帯(P29) ・東京の気候帯(P29) ・世界の気候帯の雨温図(P29) ・東京の雨温図(P29) ・熱帯の分布(P30) ・ジャカルタと東京の雨温図(P30) ・乾燥帯の分布(P32) ・サララと東京の雨温図(P32) ・温帯の分布(P34) ・ハルセロと東京の雨温図(P34) ・寒帯の分布(P36) ・ヤクニツツと東京の雨温図(P36) ・旧グリニッジ天文台の地図に書かれた各国の都市名と数字(P8) ・緯度・経度のしくみ(P8) ・地球儀を使った距離と方位のはかり方(P11) ・メルカトル図法(P11) ・モルワイテ図法(P11) ・正距方位図法(P11) ・日本の領域と排他的経済水域(P16) ・国土の東端(P16) ・国土の南端(P16) ・日本の領域をとらえる(P17) ・沖ノ鳥島を守るために(P17) ・世界の気候区分(P26) ・東京の雨温図(P26) ・アララップール(マレーシア)・東京の雨温図(P28) ・ウランバートル(モンゴル)・東京の雨温図(P30) ・イタリヤの気候と農業(P32) ・ローマ(イタリア)・東京の雨温図(P32) ・ハロウ(アメリカ/アラサカ州)・東京の雨温図(P34) ・ラパス(ボリビア)・東京の雨温図(P36) ・多くの言語が書かれた案内表示(P38) ・アジアの国々と地形(P46) ・アジア各地の雨温図(P46) ・日本とアジアの国々とのかわり(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」の開幕式典(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」のポスター(P56) ・島国、日本を囲む海(P141) ・ヒートアイランド現象と局地的な集中豪雨(P147) ・東京の年間の熱帯夜日数の変化(P147) 	<ul style="list-style-type: none"> ・高地の分布(P38) ・クスコと東京の雨温図(P38) ・東京の卸売市場で取り扱われるほおばやの産地(P26) ・空から見た学校の周りの様子(P130) ・東京都練馬区大泉地域の位置(P130) ・身近な地域を調査する際の視点と気づき・疑問の例(P131) ・調査計画書の例(P132) ・「地理院地図」を使ってルートマップを作成した例(P133) ・練馬区大泉地域の気候と東京の雨温図(P136) ・野外調査で分かったことの例(P138) ・ウェブサイトでダウンロードした統計資料(P140) ・人口密度の統計資料から作成した地図(P140) ・調査結果をグラフや地図にまとめよう(P140~141) ・さまざまなまとめ方とそこから分析・考察した例(P141) ・印刷用ラフの巨大地図が起きた際に発生する想定されている津波の高さ(P150) ・災害時の帰宅困難者対策(P151) ・東京都港区が提供している水位・雨量情報(P153) ・三大都市圏の面積と人口が全国に占める割合(P154) ・日本の人口分布(P154) ・大都市に集中する人口(P154) ・再利用可能な資源が眠る都市鉱山(P157) ・日本の主な工業地域(P160) ・日本の工業の特色と工業地域(P160) ・多くの商業施設が集まる渋谷(P162) ・コテナナの積み降ろし(P164) ・外国人旅行者向けの観光案内所(P164) ・鉄道を利用した東京~大板間の移動時間の変化(P165) ・新幹線と主な航空路(P165) ・日本の人口密度と主な都市の分布(P153) ・人口分布のかたまりと課題(P153) ・日本の主な工業地域(P158) ・高速道路網の整備(P161) ・都心のオフィス街(P163) ・農産物を活用した地域活性化(P186) ・農村と都市の交流による地域活性化(P188-189) ・工業からみた東海の特徴(P211) ・東京中央卸売市場でのレタスの果別入荷量(P212) ・中央高地の工業の拡大(P212-213) ・軽井沢町への県別転入者数(P213) ・農業からみた東海の特徴(P217) ・東京中央卸売市場(豊洲市場)でのまぐろの競り(P217) ・東京2020オリンピック・パラリンピックの開催地・開催が行われる都市の順位と面積(P20) ・関東地方の交通網(P221) ・関東平野に広がる東京大都市圏(P221) ・関東地方の地形(P222) ・関東地方の人口密度(P222) ・低地と台地からなる関東平野(P222-223) ・関東地方各地の雨温図(P222) ・東京都の島々(P223) ・伊豆諸島・小笠原諸島の位置と小笠原諸島の父島(P223) ・乾燥した冬と暑い夏(P223) ・東京都の都心に集まるさまざまな国の機関(P224) ・日本の首都・東京(P224) ・世界都市・東京(P224-225) ・世界が注目！日本の都市文化(P225) 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域区分から日本の特色をつかむ(P166) ・「航空路」に注目した日本地図(P167) ・ゆいさきが考えた地域区分の例(P167) ・日本の「主な港」に注目した日本地図(P169) ・九州の中心都市としての役割(P180) ・九州地方の位置と大陸との結び付き(P180) ・自然を生かした産業(P182) ・日本の公害(P186) ・高知県の農業産出額と野菜的輸送形態、まな出荷先への輸送手段(P197) ・東京へ出荷されるなすの量と価格(P197) ・交通網の発達による市場の拡大(P197) ・通信網を生かした地域おこしの取り組み(P202) ・ニュータウン(P208) ・結びつきを強める名古屋大都市圏(P225) ・東京へ出荷されるレタスの量(P229) ・関東地方(P235) ・関東平野に広がる市街地と東京スカイツリー(P236) ・東京駅を利用して勤務先に向かう人々(P236) ・関東地方の自然(P238) ・世界遺産に登録されている小笠原諸島の父島(P238) ・内陸と海沿いに異なる気候(P239) ・関東地方の主な都市の雨温図(P239) ・霞が関にある官庁街とその周辺(P240) ・東京の中心部に集中するさまざまな機関(P240) ・東京都の中心区における昼間人口と夜間人口の違い(P240) ・日本の首都、東京(P240) ・世界都市、Tokyo(P240~241) ・交通網の中心と交通・通信の結びつき(P225) ・日本と世界との異なる気候(国内線)(P225) ・旅客数の多い日本の航空路線(国内線)(P225) ・情報通信への従業者数の多い県(P225) ・東京23区への通勤・通学者数(P226) ・主な都市の昼間の人口と夜間の人口のちがい(P226) ・混雑する朝の新宿駅(P226) ・混雑する朝の新宿駅(P226) ・東京都の都心と副都心(P226) ・三大都市圏の人口の比率(P226) ・郊外の住宅地の広がり(P226-227) ・人口が急増している東京湾の臨海部(P227) ・都心のオフィス街(P227) ・過密化を解消するための取り組み(P227) ・臨海部と内陸部の工業地帯(P228-229) ・輸出入額の多い貿易港(P228) ・はくさいの収穫(P229) ・大消費地を支える関東地方の農業(P229) ・住宅が密集する地区(P230) ・荒川周辺の再開発地区とスーパー堤防・排水機場(P230-231) ・強まる一極集中で高まるリスク(P230) ・東京スカイツリー(P230) ・防災を考えた都市の再開発(P230-231) ・荒川の現在の水位の表示(P231) ・地下調整池(P231) ・オリンピック・パラリンピックからみる東京の変化(P232) ・2020年に合わせて導入・開業予定の東京BRTと山手線の新駅(P232) ・オリンピック・パラリンピックと再開発(P232) ・東京都のホテルの客室数(P232)
<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナル駅となっている新宿駅(P241) ・通勤・通学時間帯に混雑する新宿駅(P241) ・東京都への集中(P241) ・都心と副都心(P241) ・東京都圏内の地価の比較(P242) ・東京大都市圏の拡大と東京23区への通勤・通学者数(P242) ・東京大都市圏の過密問題とその対策(P242-243) ・東京大都市圏(P242) ・筑波研究学園都市(P242) ・全国第2位の大都市、横浜(P243) ・東京都多摩市の人口ピラミッドの推移(P243) ・ゲームの制作会社の様子(P244) ・情報と娯楽を扱う産業の発達(P244) ・活発な消費活動を支える産業(P244-245) ・サービスマーケティングの年間売上額(P244) ・ファッションやスイーツなどの流行の発信地、原宿(P244) ・変化し続ける湾岸地域(P245) ・関東地方の高速道路網と大型ショッピングセンターなどの分布(P245) ・卸売業と小売業における年間商品販売額(P245) ・印刷工場での製本作業の様子(P246) ・印刷業の出荷額(P246) ・臨海部から発達した京浜工業地帯(P246-247) ・京浜工業地帯と京浜・北関東工業地域の工業出荷額の内訳(P246) ・北関東への工場進出と流通の変化(P247) ・関東地方の主な工業と出荷額(P247) ・大田市場に集められた茨城農産物のほくさい(P248) ・食料の大消費地を支える農業(P248-249) ・主な野菜などの栽培地と各県の農産物出荷の内訳(P249) ・山間部の役割と地域の再生(P249) ・都市と農村の交流の取り組み(P252) ・世田谷区内の商店街で行われた川場村の農産物の販売(P252) ・北海道産の鉄粉米が売られているスーパーマーケット(P277) ・鉄道と道路の立体交差(P290) ・人口に占める外国人の割合が高い市区町村(P256) ・北海道の観光の課題(P257) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京へ出荷されるなすの量と価格(P197) ・交通網の発達による市場の拡大(P197) ・通信網を生かした地域おこしの取り組み(P202) ・ニュータウン(P208) ・結びつきを強める名古屋大都市圏(P225) ・東京へ出荷されるレタスの量(P229) ・関東地方(P235) ・関東平野に広がる市街地と東京スカイツリー(P236) ・東京駅を利用して勤務先に向かう人々(P236) ・関東地方の自然(P238) ・世界遺産に登録されている小笠原諸島の父島(P238) ・内陸と海沿いに異なる気候(P239) ・関東地方の主な都市の雨温図(P239) ・霞が関にある官庁街とその周辺(P240) ・東京の中心部に集中するさまざまな機関(P240) ・東京都の中心区における昼間人口と夜間人口の違い(P240) ・日本の首都、東京(P240) ・世界都市、Tokyo(P240~241) ・交通網の中心と交通・通信の結びつき(P225) ・日本と世界との異なる気候(国内線)(P225) ・旅客数の多い日本の航空路線(国内線)(P225) ・情報通信への従業者数の多い県(P225) ・東京23区への通勤・通学者数(P226) ・主な都市の昼間の人口と夜間の人口のちがい(P226) ・混雑する朝の新宿駅(P226) ・混雑する朝の新宿駅(P226) ・東京都の都心と副都心(P226) ・三大都市圏の人口の比率(P226) ・郊外の住宅地の広がり(P226-227) ・人口が急増している東京湾の臨海部(P227) ・都心のオフィス街(P227) ・過密化を解消するための取り組み(P227) ・臨海部と内陸部の工業地帯(P228-229) ・輸出入額の多い貿易港(P228) ・はくさいの収穫(P229) ・大消費地を支える関東地方の農業(P229) ・住宅が密集する地区(P230) ・荒川周辺の再開発地区とスーパー堤防・排水機場(P230-231) ・強まる一極集中で高まるリスク(P230) ・東京スカイツリー(P230) ・防災を考えた都市の再開発(P230-231) ・荒川の現在の水位の表示(P231) ・地下調整池(P231) ・オリンピック・パラリンピックからみる東京の変化(P232) ・2020年に合わせて導入・開業予定の東京BRTと山手線の新駅(P232) ・オリンピック・パラリンピックと再開発(P232) ・東京都のホテルの客室数(P232) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京の雨温図(P28) ・ウランバートル(モンゴル)・東京の雨温図(P30) ・イタリヤの気候と農業(P32) ・ローマ(イタリア)・東京の雨温図(P32) ・ハロウ(アメリカ/アラサカ州)・東京の雨温図(P34) ・ラパス(ボリビア)・東京の雨温図(P36) ・多くの言語が書かれた案内表示(P38) ・アジアの国々と地形(P46) ・アジア各地の雨温図(P46) ・日本とアジアの国々とのかわり(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」の開幕式典(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」のポスター(P56) ・島国、日本を囲む海(P141) ・ヒートアイランド現象と局地的な集中豪雨(P147) ・東京の年間の熱帯夜日数の変化(P147)
<ul style="list-style-type: none"> ・東京の雨温図(P28) ・ウランバートル(モンゴル)・東京の雨温図(P30) ・イタリヤの気候と農業(P32) ・ローマ(イタリア)・東京の雨温図(P32) ・ハロウ(アメリカ/アラサカ州)・東京の雨温図(P34) ・ラパス(ボリビア)・東京の雨温図(P36) ・多くの言語が書かれた案内表示(P38) ・アジアの国々と地形(P46) ・アジア各地の雨温図(P46) ・日本とアジアの国々とのかわり(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」の開幕式典(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」のポスター(P56) ・島国、日本を囲む海(P141) ・ヒートアイランド現象と局地的な集中豪雨(P147) ・東京の年間の熱帯夜日数の変化(P147) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京の雨温図(P28) ・ウランバートル(モンゴル)・東京の雨温図(P30) ・イタリヤの気候と農業(P32) ・ローマ(イタリア)・東京の雨温図(P32) ・ハロウ(アメリカ/アラサカ州)・東京の雨温図(P34) ・ラパス(ボリビア)・東京の雨温図(P36) ・多くの言語が書かれた案内表示(P38) ・アジアの国々と地形(P46) ・アジア各地の雨温図(P46) ・日本とアジアの国々とのかわり(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」の開幕式典(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」のポスター(P56) ・島国、日本を囲む海(P141) ・ヒートアイランド現象と局地的な集中豪雨(P147) ・東京の年間の熱帯夜日数の変化(P147) 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京の雨温図(P28) ・ウランバートル(モンゴル)・東京の雨温図(P30) ・イタリヤの気候と農業(P32) ・ローマ(イタリア)・東京の雨温図(P32) ・ハロウ(アメリカ/アラサカ州)・東京の雨温図(P34) ・ラパス(ボリビア)・東京の雨温図(P36) ・多くの言語が書かれた案内表示(P38) ・アジアの国々と地形(P46) ・アジア各地の雨温図(P46) ・日本とアジアの国々とのかわり(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」の開幕式典(P56) ・「東アジア文化都市2019豊島」のポスター(P56) ・島国、日本を囲む海(P141) ・ヒートアイランド現象と局地的な集中豪雨(P147) ・東京の年間の熱帯夜日数の変化(P147)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他
東書	<p>【本文】貴重な自然が残る北方領土 北海道東方の歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島は北方領土とよばれ、根室市などに属する日本固有の領土です。しかし、現在はロシアが不法に占拠しており、日本は抗議を続けています。</p> <p>北方領土は、カムチャツカ半島から北海道まで連なる島々の南に位置しており、北海道東部の納沙布岬と、歯舞群島の西端の間で、約4kmしかはなれていません。</p> <p>歯舞群島は平たんな島々が多く、その北東にある色丹島も標高が低い一方、国後島や択捉島は大きな島です。なかでも択捉島は、日本の領土の中で、本州などの主要四島以外では最大の島です。これらの島々には、草原や冷帯特有の植物が広がっています。一年を通して気温が低いため、標高が低い場所にも高山植物が見られ、こうした貴重な自然環境の保護が必要です。</p> <p>また、北方領土には活火山もあり、国後島北部の爺爺岳は、標高1772mの北方領土の最高峰で、1973(昭和48)年の噴火では、北海道の東部にも火山灰が降りました。</p> <p>一方、歯舞群島や色丹島、国後島は、広い大陸棚に囲まれており、からぶとますやさけなどの、豊富な漁業資源にもめぐまれています。(P27)</p> <p>【本文】豊かな海のめぐみ 根室や釧路は、ベーリング海やオホーツク海で行われる北洋漁業の拠点になりました。現在ではロシアの漁船もこれらの港に立ち寄り、取り引きが行われています。一方、ロシアの間では、北方領土をめぐる領土問題が解決していません。ため、漁場や操業権をめぐる緊張関係も続いています。(P261)</p> <p>【写真】 竹島・尖閣諸島・根室から見える歯舞群島(P6) 日本の北端(P25) 北海道の根室半島上空から見た歯舞群島(P27) 自然環境にめぐまれた択捉島(P27)</p> <p>【地図】 国土の広がり 国土の広がり 竹島、尖閣諸島、北方領土の位置(P26) 北方領土周辺の地形(P27) 歯舞群島がのる20万分の1地勢図(P27)</p>	<p>【本文】漁業資源にめぐまれた竹島 竹島は、島根県隠岐の島町に属し、隠岐諸島の北西、約150kmに位置する日本固有の領土です。しかし、韓国が不法に占拠しているため、日本は抗議を続けています。</p> <p>な台地のふちには、日本海中央にある海中の巨大(西島)と、標高97mの女島(東島)を中心に、いくつもの島で構成されています。もともと古い海底火山の噴火でできた島でしたが、周囲が波に侵食され、現在のような断崖に囲まれた地形になりました。</p> <p>竹島周辺の海は、東シナ海から流れてくる暖流の対馬海流と、樺太(サハリン)から潮境に近いたため、かにやいか、あじなどの回遊魚といたった、豊富な漁業資源にめぐまれています。(P26)</p> <p>【写真】 竹島・尖閣諸島・根室から見える歯舞群島(P6) 竹島(P26) 断崖に囲まれた竹島(P26)</p> <p>【地図】 国土の広がり 国土の広がり 竹島、尖閣諸島、北方領土の位置(P26) 竹島の2万5000分の1地形図(P26)</p>	<p>【本文】資源が期待される尖閣諸島 尖閣諸島は、沖縄県石垣市に属する日本固有の領土で、中心である魚釣島は、石垣島の北、約170kmに位置します。日本が実効支配をしているため、領土問題はありませんが、中国や台湾が領有権を主張しています。</p> <p>尖閣諸島は、東シナ海の大陸棚の南東のふちに位置し、魚釣島、久場島、南小島、北小島など、大小八つの主な島で構成されます。最大の魚釣島は東西が約4km、南北が約1.5kmで、最高地点が標高362mあります。</p> <p>魚釣島は、もともと楕円形の島だったものが、波によって南側が大きくなっていき、現在の形になったと考えられています。久場島は円形で、中心に丸い形の小さなぼみがあるため、火山だと考えられています。噴火の記録は残っていません。</p> <p>尖閣諸島は気候が温暖で、亜熱帯特有の植物が広がり、魚釣島などは、隆起して海面上に現れたさんご礁に囲まれています。</p> <p>一方、国際連合(国連)の関係機関の調査では、周辺の大陸棚では石油が採れる可能性が指摘されています。また、尖閣諸島の南の海底には、地中のマグマが海水に冷やされ、資源になる鉱物が固まった熱水鉱床があると考えられています。(P27)</p> <p>【写真】 竹島・尖閣諸島・根室から見える歯舞群島(P6) 尖閣諸島の南小島、北小島、魚釣島(P26) 尖閣諸島の久場島(P27)</p> <p>【地図】 国土の広がり 国土の広がり 竹島、尖閣諸島、北方領土の位置(P26) 久場島の5万分の1地形図(P27)</p>	<p>【本文】地理的に見られる島々の特色 海洋国の日本は大小さまざまな島で構成されていますが、とり合える島々の間で、領土をめぐる問題がかかえる島々もあります。ここでは、自然環境や、問題の背景の一つである資源に着目して、こうした島々の地理的な特色を、さまざまに見ていきましょう。(P26)</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題として、ここでは「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて調査する。「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて調査する。

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他
<p>教 出</p>	<p>【本文】北方領土をめぐる問題 資料1の地図中の千島列島を見ると、カムチャツカ半島とシムシム島の間に、ウルップ島と択捉島の間の国境線に気づきます。2本の国境線に挟まれたシムシム島からウルップ島までの島々は白で示されています。 カムチャツカ半島まではロシア連邦の領土、択捉島の東にある国境線から北海道までは日本の領土ですが、2本の国境線の間に白で示された島々は帰属が未定の地域を示しています。 北海道の東に位置する歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を北方領土とよびます。北方領土は、1945年の第二次世界大戦の終結後にソ連に占領されました。終戦時には北方領土には約17000人の日本人が生活していましたが、強制退去させられました。北方領土はソ連の解体後も現在に至るまでロシア連邦によって不法に占拠されています。日本政府は、ロシア連邦政府に対し、日本固有の領土である北方領土の返還を求め続けていますが、いまだに実現されていません。一方で、1992年に始まった北方領土へのビザなし交流など民間での友好的な結びつきは続いています。(P24-P25) 【本文】EJや日本とのつながり 日本海を挟んで対岸にある日本との関係も深まっています。特に、ロシアは石油・天然ガスなどの鉱産資源だけでなく、魚介類(さけ・かになど)や、木材を輸出しています。また、日本からは自動車などをロシアに輸出しており、両国の経済的な結びつきが強まっています。その一方で、北方領土などをめぐる問題はいまだに解決されておらず、大きな課題となっています。(P79) 【地図】 日本の領土・領海と排他的経済水域(P22) 北方領土とその周辺 (P24) 南東を上にして、日本海周辺を描いた地図 (P25) 【写真】 ビザなし交流で根室港に到着したロシア側からの訪問団 (P24) 墓地で手を合わせせる元島民 (P259) 【年表】北方領土に関する主なできごと (P24)</p>	<p>【本文】竹島と尖閣諸島 竹島周辺では、江戸時代の初めから日本人が漁業を行ってききました。1905年に政府は、竹島を国際法に基づき島根県に編入し、日本固有の領土としました。1952年以降、韓国が竹島を自国の領土として主張し、現在まで不当に占拠し続けています。日本はこれに抗議を重ねるとともに、国際社会の場での話し合いを提案しています。【写真】 竹島 (P25) 【地図】 日本の領土・領海と排他的経済水域 (P22) 南東を上にして、日本海周辺を描いた地図 (P25)</p>	<p>【本文】竹島と尖閣諸島 尖閣諸島は、1895年に沖縄県に編入された日本固有の領土です。第二次世界大戦後には、アメリカ合衆国の施政の下に置かれましたが、1971年に沖繩返還協定が結ばれ、翌年日本に復帰しました。尖閣諸島は、アメリカ合衆国の施政の下にあり、2012年、日本は尖閣諸島に支配をめぐり、中国が領有を主張し始めました。近年、中国船が尖閣諸島に侵入する事態が生じ、2012年、日本は島々の大半を国有化しました。(P25) 【地図】 日本の領土・領海と排他的経済水域 (P22) 南東を上にして、日本海周辺を描いた地図 (P25) 【写真】 尖閣諸島 (P25)</p>	<p>【本文】竹島と尖閣諸島 領土をめぐる対立については、武力衝突や戦争の原因となることもあります。各国が冷静に問題に向き合い、対立を乗り越えて平和的な解決を目指すことが重要です。(P25)</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題として、ここでは「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて調査する。
「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」

発行者	北方領土に関する 記述の概要	竹島に関する 記述の概要	尖閣諸島に関する 記述の概要	その他
<p>帝国</p>	<p>【本文】北方領土 北海道の北東部にある歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島は、北方領土とよばれ、北海道根室市などに属する日本固有の領土です。1855年に、日本とロシアの国境を択捉島と得撫島の間で確認してから、北方領土をほかの国の領土とする条約が結ばれたことはありません。北方領土の近海は水産資源が豊かで、かつて多くの日本人がこれら島の島に住んでいました。 しかし、北方領土は1945年に、日本との条約を無視して一方的に侵攻してきたソビエト連邦に占領され、日本人は立ちのかわれ、ソビエト連邦はサンフランシスコ平和条約に署名せず、現在までロシアが不法に占拠した状態となっており、日本は、北方領土の返還に向けてロシアと平和条約を結ぶため、交渉を続けています。(P20) 【写真】 日本の北端 (P18) 納沙布岬から見える北方領土の島々 (P20) 日本国民と北方領土に住むロシア人との交流 【地図】 北方領土周辺の国境の移り変わり (P20)</p>	<p>【本文】竹島 日本海にある竹島は、島根県隠岐の島町に属する日本固有の領土です。17世紀には現在の島取島の人々が漁を行っており、1905年に明治政府が島根県への編入を内閣で定めて、自国の領土とする考えを公式に示しました。 しかし、サンフランシスコ平和条約で竹島に対する主張を退けられた韓国は、1952年に海洋への権利を唱えて一方的に公海上に国境線を引き、竹島に海洋警察隊や灯台を置いて、不法に占拠しています。日本はこれに抗議し、国際司法裁判所での話し合いをたびたび呼びかけていますが、韓国が応じていません。(P20~21) 【コラム】漁業が盛んだった昔の竹島 竹島は、暖流の対馬海流と寒流のリマン海流がぶつかる海域に位置しているため、周辺の海は昔からさまざまな魚介類がとれる豊かな漁場でした。江戸時代の初めには、米子(島根県)の人々が、あしかばねやあわび漁を行っていました。 1905年、隠岐の島民の願いを受けて明治政府は、竹島の島根県への編入を定めました。それを告示した2月22日は、2005年に島根県議会により「竹島の日」と定められました。 【写真】 竹島 (P21) 隠岐の人々が行っていた竹島での漁の様子 (P21) 【地図】 日本の東西南北の端と排他的経済水域の範囲 (P18) 竹島の位置 (P21)</p>	<p>【本文】尖閣諸島 東シナ海にある尖閣諸島は、沖縄県石垣市に属する日本固有の領土です。明治政府が、ほかの国の支配が及んでいないことを慎重に確認したうえで、1895年に沖縄県への編入を内閣で定めて、自国の領土とする考えを公式に示しました。その後、一時は島で20人以上が暮らし、かつおぶし工場も造られました。サンフランシスコ平和条約でも、南西諸島の一部として日本の領土とされました。尖閣諸島をほかの国の領土とする条約が結ばれたことはなく、日本の国との間で解決すべき領有をめぐる問題はありせん。尖閣諸島では、1960年代には、石油などの資源が周辺の海底にある可能性が注目され、1970年代に入ると、中国などが領有権を主張するようになりまし。その後、日本は2012年に、尖閣諸島を国有化しました。(P21) 【写真】 尖閣諸島 (P21) 【地図】 日本の東西南北の端と排他的経済水域の範囲 (P18) 尖閣諸島の位置 (P21)</p>	<p>【本文】国際法に基づいた日本の領土 日本の領域は、歴史的ないきさつも踏まえて、国際法に基づいて定められてきました。現在の日本の領土は、第二次世界大戦後の1951年に結ばれたサンフランシスコ平和条約によって定められました。しかし、日本の領域には、領有をめぐって隣国との間で課題がある地域もあります。(P20)</p>

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題として、ここでは「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて調査する。「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、特記すべき事項があれば記載する。

発行者	北方領土に関する 記述の概要	竹島に関する 記述の概要	尖閣諸島に関する 記述の概要	その他
日 文	<p>【本文】北方領土 北方領土は、歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島からなる日本固有の領土です。面積は合計約5000km²もあり、福岡県や千葉県とほぼ同じ広さです。日本は18世紀ごろから本格的な開発を始め、1855年の日露通好条約で、日本の領土であることが確認されました。周辺の海域は、こんぶやかになどの水産資源が豊富で、かつては多くの日本人が漁業をしながら生活していました。しかし、1945年の第二次世界大戦後にソ連に占領され、ソ連解体後もロシアが不法に占拠しています。ソ連に占領されるとともに、当時住んでいた日本人はふるさとを追われ、現在、北方領土に日本人は住んでいません。日本は、北方領土の返還をロシアに強く要求していますが、いまだに実現していません。(P18)</p> <p>【本文】領土問題の解決に向けて 第二次世界大戦後の1951年のサンフランシスコ平和条約の内容からも、北方領土と竹島が日本固有の領土であることが確認できます。日本は、この条約の内容などに基づいて、北方領土と竹島の領土問題を国際社会に訴え、平和的な解決をめざしています。</p> <p>現在、北方領土では、領土問題の解決に向けて、元島民を含む日本人と北方領土に住むロシア人が相互訪問するなど、交流を深めています。竹島については、この問題を国際司法裁判所で取り上げるように韓国に提案していますが、韓国は拒否しています。(P19)</p> <p>【地図】 北方領土・竹島・尖閣諸島の位置 (P18) 北方領土付近の国境の変化 (P18)</p> <p>【写真】 国土の北端 (P16) 羅臼町から見た国後島 (P19) 「ビザなし交流」で色丹島の一般家庭をおとずれ、ロシア人と交流する訪問団 (P19)</p>	<p>【本文】竹島 竹島は、本州から約200kmはなれた日本海にある日本固有の領土です。竹島周辺は豊かな漁場で、17世紀初めには日本人が漁業などに利用していました。1905年には国際法に従って島根県に編入されました。ところが1952年から韓国が、一方的に自国の領土であると主張して竹島を取りこみ、警備隊員を常駐させたり、施設を作ったりして、不法に占拠しています。日本は、韓国に対して何度も嚴重に抗議しています。(P18)</p> <p>【本文】領土問題の解決に向けて 第二次世界大戦後の1951年のサンフランシスコ平和条約の内容からも、北方領土と竹島が日本固有の領土であることが確認できます。日本は、この条約の内容などに基づいて、北方領土と竹島の領土問題を国際社会に訴え、平和的な解決をめざしています。</p> <p>現在、北方領土では、領土問題の解決に向けて、元島民を含む日本人と北方領土に住むロシア人が相互訪問するなど、交流を深めています。竹島については、この問題を国際司法裁判所で取り上げるように韓国に提案していますが、韓国は拒否しています。(P19)</p> <p>【地図】 日本の領域と排他的経済水域 (P16) 北方領土・竹島・尖閣諸島の位置 (P18)</p> <p>【写真】 竹島 (P19) 竹島に関する資料を展示する「出張竹島展」 (P19)</p>	<p>【本文】尖閣諸島をとりまく情勢 尖閣諸島は、石垣島から約170kmはなれた東シナ海にあります。1895年に日本が自国の領土であることを宣言して、沖縄県に編入しました。また、サンフランシスコ平和条約でも日本の領土とされ、このことと周辺の国々から反対はありませんでした。その後も、日本固有の領土として管理されてきており、尖閣諸島には領土問題は存在していません。</p> <p>ところが、東シナ海に石油が埋蔵されている可能性が指摘され、1970年代になつて、中国が尖閣諸島の領有権を主張するようになり、最近では、中国の船が日本の領海にたびたび侵入してきているため、日本は、中国に嚴重に抗議し、領土の保全に取り組んでいます。(P19)</p> <p>【地図】 北方領土・竹島・尖閣諸島の位置 (P18)</p> <p>【写真】 日本の領域と排他的経済水域 (P16) 尖閣諸島 (P19) 尖閣諸島の日本の領海に侵入する中国の船 (P19)</p>	記載なし

※ 我が国の位置と領土をめぐる問題として、ここでは「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」以外で、我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて調査する。「その他」については、「北方領土」、「竹島」及び「尖閣諸島」

発行者	国旗・国歌に関する記述	外国の国旗に関する記述
東書	<p>【本文】国旗に表れた国の特色 世界の国々には、国の歴史や人々の願いを表した国旗があります。地域や歴史に共通点がある国々の国旗には、デザインや色に共通点があります。(P11)</p>	<p>【図】世界の国・日本の都道府県クイズを作ろう(P7) 【写真】国際連合本部にかかげられた国旗(P10) 【本文】国旗に表れた国の特色 例えば、オセアニア州の国々の国旗には、南十字星がえがかれた国旗や、イギリスの国旗であるユニオンジャックの入り見たる国旗が多く見られます。また、アジア州やアフリカ州の、イスラム教徒が多い国々の国旗には、三日月と星がえがかれたものが見られます。これらは、その国々が南半球にあることや、イギリスとの関係、信仰する宗教の象徴を示しています。(P11) 【コラム】イギリスの国旗「ユニオンジャック」の由来 イギリスは、正式名称を「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国」といい、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四つの国が連合して成り立っている国です。このことは、ユニオンジャックとよばれるイギリスの国旗の成り立ちを見ても分かります。かつてイギリスの植民地だった国々の中には、③のようにユニオンジャックを自国の国旗の一部にしている国があります。(P11) 【図】ユニオンジャックの成り立ち(P11) 【図】オセアニア州のさまざまな国旗(P11) 【図】イスラム教徒が多い国々の国旗(P11) 【本文】植民地化による影響 イギリスから独立したオーストラリアやニュージーランド、サモアやフィジーなどは、現在もイギリスとの結び付きが強く、国旗にイギリスの国旗が入っていたり、英語が公用語になっていたります。(P132)</p>
教出	<p>【本文】国旗は語る 国旗には各国の文化や歴史が織り込まれています。(P19)</p>	<p>【図】世界のさまざまな国旗 (P18) 【本文】国旗は語る イギリスの国旗は「ユニオンジャック」とよばれ、資料1のように、イングランド、スコットランド、かつてのアイルランドの旗を組み合わせたものです。イギリスの正式な国名は、「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」といいます。現在のイギリスは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの各地域から構成され、例えばサッカーの世界大会では各地域から代表が参加します。オセアニア州のオーストラリアやニュージーランド、フィジーなどの国旗の中にも「ユニオンジャック」がみられます。これらの国々はかつてイギリスの植民地であり、イギリスとの歴史的、文化的な関係が深いことがわかります。 カナダの国旗にはかつて「ユニオンジャック」が含まれていましたが、1965年にかえでの案が中央に描かれた現在の国旗に変わりました。南アフリカ共和国では、ヨーロッパ系の人々の支配が終わり、新しい国づくりに合わせて1994年に現在の国旗に変わりました。こうしたさまざまな理由から、国旗のデザインが変わる場合もあります。また、イスラム教徒の多い国では、イスラム教を象徴する緑色を使い、三日月と星のある国旗がみられます。(P18) 【写真】イングランドの旗を掲げる体操の選手と、スコットランド代表のサッカーチームを応援する人 (P18) 【写真】インド・パキスタン国境の検問所で行われる両国の国旗を降ろす儀式 (P19)</p>
帝国	<p>【本文】国旗に注目して見た国々 世界の国々には、さまざまな形や色や色の国旗があります。国旗のデザインには、その国の自然や歴史、宗教などと関係する絵柄が取り入れられていたり、自由や平和といった人々の思いが込められています。(P7)</p>	<p>【図】オセアニア州の国々の国旗の例 (P7) 【本文】国旗に注目して見た国々 オセアニア州では、南半球の夜空に輝く南十字星が描かれていたり、太平洋を象徴する青色が地色となっていたりする国旗が多く見られます。また、「ユニオンジャック」とよばれるイギリスの国旗が、デザインの一部に取り入れられている国々もあります。オセアニアの国々を、国旗に注目して見てみましょう。(P7) 【本文】移民の歴史 オセアニア州には、国旗の中にイギリスの国旗が描かれている国や、現在でもフランス領になっている地域があります。(P124) 【図】オセアニアの国々の国旗 (P124)</p>
日文	<p>【本文】国旗からみる世界 世界の国々は、それぞれ国旗を定めています。国旗の色、形、図柄（シンボルやデザイン）には、国の歴史や人々の思いがこめられていて、国の象徴として大切にされています。オリンピックの表彰式やサッカーのワールドカップの試合前などには国旗が掲げられます。世界には似た図柄の国旗がたくさんあります。(P6) 【写真】オリンピックで掲げられる日本の国旗 (P6)</p>	<p>【図】似た図柄の国旗 イギリスの国旗をとりこんでいる国は、イギリスと歴史的に深いつながりがあります。これらの国旗は、現在でもイギリス連邦の一員であることを示しています。(P6) 【図】世界の国旗 ヨーロッパ北部には、十字をかたどった国旗の国がいくつかあります。世界の国旗で最も多いのは、横か縦に2色または3色ならんでいるものです。(アメリカの国旗について) 13本の帯は独立したときの州の数、50個の星は現在の州の数です。州の数が増えるたびに、星の数が増やされました。 国旗は長方形とは限りません。 国旗には文字が書かれているものもあります。(P7)</p>

「別紙2-8」【防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱い】(中学校 社会 地理的分野)

発行者	防災や、自然災害時における関係機関(国・地方公共団体・自衛隊)の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
<p>【写真】津波避難タワー(P1)</p> <p>【その他】ハリケーンから人々を守る(P110)</p> <p>【写真】気象観測用の航空機「ハリケーンハンター」(P110)</p> <p>【その他】文献資料を使って調査する(P141)</p> <p>【その他】調査テーマを決めるヒント(P142)</p> <p>【その他】調査の準備をする(P143)</p> <p>【その他】調査する(P149)</p> <p>【その他】調査に役立つ資料を集める(P150)</p> <p>【その他】調査する(P151)</p> <p>【その他】考察しまとめる(P153)</p> <p>【その他】発表する(P155)</p> <p>【その他】日本がどのような国かイメージしよう(P156-157)</p> <p>【本文】急で短い日本の川(P159)</p> <p>【本文】被災地へのさまざまな支援(P164-165)</p> <p>【本文】防災対策と防災意識(P165)</p> <p>【図】災害時の公的機関の活動と支援の動き(P165)</p> <p>【写真】自衛隊の救命・救出活動(P165)</p> <p>【写真】中学生のボランティアによるたき出し(P165)</p> <p>【地図】岩手県宮古市・老地区の津波ハザードマップ(P165)</p> <p>【その他】震災から命を守る(P166-167)</p> <p>【本文】火山とともに暮らす人々(P188)</p> <p>【コラム】火山防災の取り組みを世界に発信(P189)</p> <p>【本文】日本の屋根(P222)</p> <p>【写真】濃尾平野の輪中地帯(P222)</p> <p>【図】輪中地帯の町の様子(P223)</p> <p>【コラム】集落を移転するべきか(P253)</p> <p>【本文】火山と生きる(P260-261)</p>	<p>【その他】日本がどのような国かイメージしよう(P156-157)</p> <p>【写真】東日本大震災の津波による仙台空港の被害(P164)</p> <p>【本文】さまざまな自然災害(P164)</p> <p>【本文】被災地へのさまざまな支援(P164-165)</p> <p>【地図】岩手県宮古市・老地区の津波ハザードマップ(P165)</p> <p>【その他】震災から命を守る(P166-167)</p> <p>【写真】東日本大震災の津波の高さを示す表示(P166)</p> <p>【地図・図】東日本大震災を引き起こした地震の震源と地震・津波発生の様式図(P167)</p> <p>【本文】日本の発電方法の変化(P171)</p> <p>【コラム】多数の「帰宅困難者」が生まれた理由を考えよう(P242-243)</p> <p>【その他】オリンピック・パラリンピックと東京(P244)</p> <p>【その他】東北地方—伝統的な生活・文化を受けつぐ人々の暮らし—(P245)</p> <p>【地図】三陸沖で発生した主な地震(P252)</p> <p>【地図・グラフ】東日本大震災の各地の津波の高さ(P252)</p> <p>【本文】教訓を伝え、引きつぐ(P252-253)</p> <p>【本文】新しいまちや社会をつくる(P253)</p> <p>【写真】復旧した三陸鉄道(P253)</p> <p>【コラム】集落を移転するべきか(P253)</p> <p>【写真】高台移転のための造成工事(P253)</p> <p>【地図】宮城県東松島市の復興計画(P253)</p> <p>【コラム】NPOを設立して、東北地方を活性化する「イベント」を企画しよう(P254)</p>	<p>【本文】ヨーロッパの環境問題(P80)</p> <p>【本文】多様な自然環境(P102)</p> <p>【写真】気象衛星から見たハリケーン「フロレンス」(P110)</p> <p>【写真】ハリケーン「マシュー」による被害(P110)</p> <p>【写真】ふだんの多摩川・河川敷と大雨のときの様子(P159)</p> <p>【本文】日本が属する温帯(P162)</p> <p>【写真】台風が強風でたおれた電柱(P164)</p> <p>【写真】大雨により堤防が決壊した鬼怒川(P164)</p> <p>【写真】御嶽山の爆発(P164)</p> <p>【本文】さまざまな自然災害(P164)</p> <p>【コラム】人間の活動と災害(P164)</p> <p>【本文】火山活動に由来する地形(P186)</p> <p>【写真】農作物への降灰(P186)</p> <p>【本文】風雨とともに暮らす人々(P188-189)</p> <p>【その他】桜島の降灰の範囲を見られるテレビの予報画面(P189)</p> <p>【写真】沖縄県の竹富島に見られる伝統的な家屋(P189)</p> <p>【写真】土砂の流出を防ぐ砂防ダム(P189)</p> <p>【本文】南北で大きく異なる気候(P211)</p> <p>【コラム】阪神・淡路大震災の教訓(P215)</p> <p>【写真】阪神・淡路大震災の被害(P215)</p> <p>【写真・地図】やませによる霧と東北地方の冷害(P246)</p> <p>【写真】1933年の地震の後に建てられた石碑(P252)</p> <p>【地図】三陸沖で発生した主な地震(P252)</p> <p>【本文】くり返す地震や津波の被害(P252)</p> <p>【本文】火山と生きる(P260-261)</p> <p>【写真】噴煙をあげる有珠山と洞爺湖温泉(P261)</p> <p>【写真】洞爺湖有珠山ジオパーク(P261)</p>	

「別紙2-8」 【 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱い】（中学校 社会 地理的分野）

発行者	防災や、自然災害時における関係機関(国・地方公共団体・自衛隊)の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
<p>【写真】防災施設について調べる(P133)</p> <p>【写真】防災施設の場所の様子を確かめる(P133)</p> <p>【その他】地域調査の手引き(P136)</p> <p>【その他】◆私たち「自然・環境」班は、(P142)</p> <p>【地図】地域のハザードマップ(P143)</p> <p>【写真】堤防道路沿いにある水防倉庫を調べる(P143)</p> <p>【コラム】災害図上訓練で地域を知る(P143)</p> <p>【写真】学校での災害図上訓練の様子(P143)</p> <p>【本文】地域の特色に応じた取り組み(P146)</p> <p>【写真】防火のための工夫(P146)</p> <p>【その他】◆この地区は1784年に大きな火事が発生して、(P146)</p> <p>【写真】完成した津波避難タワー(P158)</p> <p>【地図】南海トラフ地震の震源を予測した地図(P159)</p> <p>【地図】横須賀市で作成した津波ハザードマップ(P160)</p> <p>【本文】災害予測の大切さ(P160)</p> <p>【図】被災した地域を支援する公的なしくみ(P160)</p> <p>【地図】有珠山火山防災マップ(P161)</p> <p>【本文】災害への支援と復興(P161)</p> <p>【写真】熊本地震の被災地で、日本人とともにカレーをふるまうネパール人のボランティア(P161)</p> <p>【写真】西日本豪雨の被災地で、浴場を無料開放した自衛隊の復興艦を訪れる人々(P161)</p> <p>【コラム】釜石の津波防災教育の取り組みに学ぼう(P161)</p> <p>【本文】シラス台地と人々の暮らし(P178-179)</p> <p>【写真】地域で予想される災害について学ぶ(P188)</p> <p>【写真】寺田貞彦の像(P188)</p> <p>【コラム】震災の教訓を学ぶ(P209)</p> <p>【写真】津波による水の怖さを体験する(P209)</p> <p>【コラム】災害に強い都市を目ざして(P237)</p> <p>【写真】複合施設「オネピア」(P276)</p> <p>【写真】「まちなか防災空地」(P277)</p>	<p>【コラム】日本で地震が多いのはなぜか(P151)</p> <p>【本文】地震と火山(P158-159)</p> <p>【写真】地震にともなう津波(P158)</p> <p>【本文】地震予測の大切さ(P160)</p> <p>【本文】簡単ではない電力の問題(P167)</p> <p>【写真】東日本大震災からの復旧(P244)</p> <p>【写真】東日本大震災の震災遺構(P245)</p> <p>【本文】東北方の地形(P246-247)</p> <p>【コラム】震災の経験を受け継ぎ、未来に生かす(P256)</p> <p>【写真】震災遺構の駅のホームで開催された、震災体験を伝えるミュージカル(P256)</p> <p>【写真】噴煙を上げる御嶽山(P216)</p> <p>【その他】都市特有の課題について考えるー東京都を例に(P242)</p> <p>【本文】東西で異なる気候(P246)</p> <p>【図】リアス海岸と津波の関係(P247)</p> <p>【本文】東北の祭りと観光(P250)</p> <p>【本文】冷害を乗り越えるために(P254)</p> <p>【写真】地震による停電と復旧(P259)</p> <p>【本文】北海道の自然環境(P260)</p> <p>【本文】火山と温泉(P268-269)</p> <p>【本文】災害に強いまちづくり(P277)</p> <p>【写真】整備された商店街(P277)</p> <p>【写真】神戸港震災メモリアルパーク(P277)</p>	<p>【本文】多様な自然環境(P96)</p> <p>【コラム】ハリケーン被害と差別(P103)</p> <p>【写真】2018年のハリケーン「フロレンス」でも浸水がみられたニューオーリンズの市街地(P103)</p> <p>【写真】東海豪雨水害の様子(P136)</p> <p>【地図】地域の浸水状況図(P137)</p> <p>【年表】地域で発生した主な災害の歴史(P137)</p> <p>【その他】◆私たち歴史・文化班は、(P137)</p> <p>【その他】自然・環境班のまとめたイラストマップ(P145)</p> <p>【その他】◆私たちは、(P145)</p> <p>【写真】台風11号の接近で高波が押し寄せる漁港(P147)</p> <p>【写真】北海道胆振東部地震の強い揺れで発生した大規模な土砂崩れ(P147)</p> <p>【地図】世界で起こった主な地震の震源と火山の分布(P151)</p> <p>【コラム】日本で地震が多いのはなぜか(P151)</p> <p>【本文】日本の川(P154)</p> <p>【写真】黒部ダム(P154)</p> <p>【写真】大雨で氾濫した高梁川(P154)</p> <p>【本文】梅雨前線と台風(P157)</p> <p>【地図】日本周辺で発生した主な地震と活断層の分布図(P158)</p> <p>【本文】地震と火山(P158-159)</p> <p>【写真】阪神・淡路大震災の被害(P158)</p> <p>【本文】気象災害(P159)</p> <p>【写真】雲仙岳(平成新山)の火砕流(P159)</p> <p>【写真】土砂に押し流された住宅(P159)</p> <p>【写真】雪おろし作業の様子(P159)</p> <p>【コラム】川の地形と液状化現象(P159)</p> <p>【写真】液状化のために道路に沈み込む自動車(P159)</p> <p>【写真】修復工事が進む熊本城(P174)</p> <p>【本文】温暖な気候と台風の通り道(P177)</p> <p>【写真】噴煙を上げる桜島(P178)</p> <p>【写真】1914年の桜島の噴火によって埋もれてしまった神社の鳥居(P178)</p> <p>【本文】火山が集中する九州地方(P178)</p> <p>【本文】進む都市化と課題(P193)</p> <p>【本文】三つの中心都市(P210)</p> <p>【写真】濃尾平野の輪中(P216)</p>	

「別紙2-8」 【 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱い】（中学校 社会 地理的分野）

発行者	防災や、自然災害時における関係機関(国・地方公共団体・自衛隊)の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
<p>【コラム】大平原に発生する竜巻(トルネード)に備えて(P97)</p> <p>【写真】防災訓練で津波避難タワーに避難する人々(P150)</p> <p>【地図】南海トラフの巨大地震が起きた際に発生すると想定されている津波の高さ(P150)</p> <p>【写真】津波避難訓練で高台へと向かう小学生たち(P150)</p> <p>【本文】防災への工夫(P150)</p> <p>【図】災害が発生したときに被災地を支援するしくみ(P151)</p> <p>【写真】土砂崩れの災害が発生した場所で行った救助活動を行う消防隊・警察・自衛隊の人々(P151)</p> <p>【本文】災害への対応(P151)</p> <p>【コラム】災害時の帰宅困難者対策(P151)</p> <p>【コラム】ハザードマップの読み取り方(P152)</p> <p>【コラム】防災情報の入手のしかた(P153)</p> <p>【コラム】南西諸島での水不足対策(P175)</p> <p>【本文】火山の噴火への備え(P176-177)</p> <p>【本文】南西諸島の自然と生活(P182)</p> <p>【コラム】土砂災害に備えた防災教育(P191)</p> <p>【本文】三つの地域で異なる気候(P191)</p> <p>【コラム】震災の経験を語り継ぐ神戸(P207)</p> <p>【コラム】御嶽山噴火の教訓を伝える火山マイスター(P223)</p> <p>【コラム】都市型の水害に備える取り組み(P239)</p> <p>【コラム】津波を後世に伝える桜の木(P257)</p> <p>【その他】災害からの復興と生活の場の再生～高台に移転した岩手県宮古市田老地区を例に～(P268)</p> <p>【コラム】全員避難を実現した地域ぐるみの防災教育(P273)</p>	<p>【写真】東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)によって発生した津波が堤防を越える様子(P148)</p> <p>【地図】主な火山と地震の震源地(P148)</p> <p>【写真】東北地方太平洋沖地震で生じた液状化(P148)</p> <p>【本文】地震と火山災害が多い日本(P148-149)</p> <p>【本文】防災への工夫(P150)</p> <p>【コラム】津波を後世に伝える桜の木(P257)</p> <p>【本文】生活に根ざした水産業の営み(P263)</p> <p>【本文】新たな工業の発展と環境に配慮したエネルギーの導入(P264-265)</p> <p>【コラム】炭鉱の町から温泉テーマパークの町へ(P265)</p> <p>【コラム】災害からの復興と生活の場の再生～高台に移転した岩手県宮古市田老地区を例に～(P268)</p>	<p>【本文】寒帯から熱帯までの多様な気候(P97)</p> <p>【本文】オーストラリア大陸と太平洋の島々(P122)</p> <p>【写真】熊本地震で被害を受けた熊本城の石垣(P148)</p> <p>【図】日本列島周辺のプレート(P148)</p> <p>【地図】主な火山と地震の震源地(P148)</p> <p>【本文】地震と火山災害が多い日本(P148-149)</p> <p>【写真】噴火する霧島山(P149)</p> <p>【図】火山の恵みと火山災害(P149)</p> <p>【図】さまざまな気象災害(P149)</p> <p>【写真】豪雨による浸水被害(P149)</p> <p>【写真】大雪で動けなくなった自動車(P149)</p> <p>【本文】さまざまな気象災害(P149)</p> <p>【本文】温暖な気候と自然災害(P175)</p> <p>【写真】噴煙を上げる桜島と鹿児島市の街地(P176)</p> <p>【写真】日中でも火山灰で暗くなった街なかを走る車(P176)</p> <p>【本文】火山と共に生きる鹿児島の人々(P176)</p> <p>【本文】環境林を保全するために(P215)</p> <p>【写真】豪雪地帯の商店街(P223)</p> <p>【本文】三つの地域で異なる気候(P223)</p> <p>【本文】内陸と海沿いで異なる気候(P239)</p> <p>【本文】米作りと寒い夏の克服(P260)</p>	

「別紙2-8」【 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱い】（中学校 社会 地理的分野）

発行者	防災や、自然災害時における関係機関(国・地方公共団体・自衛隊)の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
<p>【図】「自然環境」の視点からの調査テーマ(P127)</p> <p>【表】「自然と防災班」が立てた調査計画(P127)</p> <p>【その他】実際に歩いて野外を観察する(P129)</p> <p>【その他】文献資料を使って調査する(P131)</p> <p>【その他】ハザードマップの使い方①(P132)</p> <p>【その他】気象庁が発表する防災情報の例(P148)</p> <p>【その他】日常生活のなかで行う防災対策の例(P148)</p> <p>【写真】1週間ぶんの備蓄食料(1人ぶん)の例(P148)</p> <p>【本文】防災・減災へのくふう(P148)</p> <p>【本文】どのように災害と向き合うか(P148~149)</p> <p>【その他】自助・共助・公助と避難3原則(P148)</p> <p>【コラム】せまってくる巨大地震に備えて(P149)</p> <p>【地図】南海トラフで起こる巨大地震の想定震源域(P149)</p> <p>【写真】建物の耐震化(P149)</p> <p>【写真】津波避難タワー(P149)</p> <p>【その他】ハザードマップをよく深く知り、使うために(P151)</p> <p>【その他】ハザードマップの使い方②(P151)</p> <p>【写真】一時的に雨水をためる地下トンネル(P169)</p> <p>【本文】沖縄の伝統的な住居と台風へのそなえ(P169)</p> <p>【本文】気候と人々の生活(P169)</p> <p>【その他】巨大地震にそなえる過疎地域の取り組み(P190)</p> <p>【写真】高知県各地の津波避難の標識(P190)</p> <p>【写真】津波避難シェルター(P190)</p> <p>【写真】高台に移転した中学校と保育園(P190)</p> <p>【写真】路面電車が被災した想定避難訓練(P190)</p> <p>【写真】避難のあり方を地域の人々が話し合うワークショップ(P190)</p> <p>【写真】黒潮町の企業が作った缶詰(P190)</p> <p>【写真】荒川周辺の再開発地区とスーパー堤防・排水機場(P230)</p> <p>【本文】防災を考えた都市の再開発(P230~231)</p> <p>【写真】地下調整池(P231)</p> <p>【本文】震災を伝承していく取り組み(P244~245)</p> <p>【本文】災害に強い地域づくりをめざして(P245)</p> <p>【その他】新しいまちづくりをめざして(P246)</p> <p>【コラム】火山と地域との共生(P259)</p> <p>【その他】有珠山防災マップ(P259)</p> <p>【その他】自然環境の視点からみた石狩平野の発展(P260)</p> <p>【写真】江別河川防災ステーション(P260)</p> <p>【その他】「自然と防災班」、交通と観光班がまとめた表(P264~265)</p> <p>【その他】「自然と防災班」の話し合いメモ(P265)</p> <p>【その他】「自然と防災班」がつくった京都府の主な災害の表(P266)</p> <p>【写真】文化財を火災から守る防災訓練(P266)</p> <p>【その他】「自然と防災班」の考察テーマ(P266)</p>	<p>【写真】東日本大震災で沿岸部をおそった津波(P144)</p> <p>【本文】地震や津波による災害(P144)</p> <p>【地図】日本周辺の主な地震災害と火山(P144)</p> <p>【コラム】地震・津波が起きるしくみ(P145)</p> <p>【その他】「釜石の奇跡」はなぜ起こったのか(P150)</p> <p>【写真】避難のようす(P150)</p> <p>【地図】端住居地区の津波浸水域(P150)</p> <p>【写真】端住居地区のようすと釜石端住居復興スタジアム(P150)</p> <p>【本文】環境問題への取り組み(P155)</p> <p>【本文】日本の電力を支えてきた中部地方(P215)</p> <p>【その他】東北絆まつり(P234)</p> <p>【写真】東日本大震災からの復興が進む市街地(P234)</p> <p>【本文】南北にのびる山地と平地(P236~237)</p> <p>【地図】東北地方の市町村別人口増加率(P242)</p> <p>【グラフ】被災した主な市町の人口の変化(P242)</p> <p>【本文】震災がもたらした急激な人口の変化(P242)</p> <p>【本文】震災で大きな影響を受けた農業・漁業(P242~243)</p> <p>【グラフ】被災した3県の水産物の水あげ量(P242)</p> <p>【本文】震災で世界にまで影響がおよんだ工業(P243)</p> <p>【写真】宮古市姉吉地区に建てられた津波記念碑(P244)</p> <p>【写真】千年希望の丘に建てられた慰霊碑の除幕式(P244)</p> <p>【写真】いのちの石碑プロジェクト(P244)</p> <p>【本文】震災を伝承していく取り組み(P244~245)</p> <p>【写真】震災の遺構として保存・公開されている荒浜地区の小学校(P245)</p> <p>【写真】震災前の荒浜地区を再現した模型を見ながら説明する元住民(P245)</p> <p>【写真】陸前高田市の中心部の復興(P245)</p> <p>【本文】災害に強い地域づくりをめざして(P245)</p> <p>【写真】玉浦西地区のまちびらきを祝ってみこしをかっこつぐ子どもたち(P245)</p> <p>【その他】新しいまちづくりをめざして(P246)</p> <p>【写真】野蒜地区とその周辺(P246)</p> <p>【写真】震災遺構として保存される旧野蒜駅のホーム(P246)</p> <p>【写真】野蒜ヶ丘に新しく開校した小学校(P246)</p> <p>【写真】野蒜ヶ丘で開催された夏祭り(P246)</p> <p>【その他】野蒜ヶ丘で自治会活動をしている佐々木さんの話(P246)</p> <p>【写真】「自然と防災班」が集めた防災パンフレットなどの資料(P266)</p> <p>【本文】課題に対する取り組みを調査し考察する(P266)</p> <p>【その他】課題に対する取り組みを調査し考察する(P267)</p> <p><small>【地図】「自然と防災班」が集めた「防災パンフレット」などの資料についていた紙製模型のマークを写した冊子(P267)</small></p> <p>【その他】すべての人々のために「京都市災害対策プラン」を立てよう！(P270)</p> <p>【その他】「自然と防災班」のまちづくりプラン(P272)</p>	<p>【本文】降水量の多い気候(P142)</p> <p>【写真】阪神・淡路大震災で倒壊した高速道路(P144)</p> <p>【本文】地震や津波による災害(P144)</p> <p>【地図】日本周辺の主な地震災害と火山(P144)</p> <p>【本文】地震の噴火による災害(P145)</p> <p>【本文】火山・火山災害からみた日本の地域区分(P145)</p> <p>【写真】雲仙岳で発生した大規模な火砕流(P145)</p> <p>【写真】土石流と洪水(P146)</p> <p>【本文】さまざまな気象災害(P146)</p> <p>【本文】自然災害と人災(P146~147)</p> <p>【写真】台風による関西国際空港の浸水(P146)</p> <p>【コラム】ヒートアイランド現象と局地的な集中豪雨(P147)</p> <p>【グラフ】東京の年間の熱帯夜日数の変化(P147)</p> <p>【写真】集中豪雨による浸水被害(P147)</p> <p>【本文】気象災害からみた日本の地域区分(P147)</p> <p>【写真】大雪で動けなくなった自動車(P147)</p> <p>【写真】新燃岳の降灰(P168)</p> <p>【本文】火山と人々の生活(P168)</p> <p>【写真】九州北部豪雨による被害(P169)</p> <p>【本文】瀬戸内の地形・気候と人口の分布(P181)</p> <p>【本文】三つの地域で異なる気候(P194~195)</p> <p>【本文】世界への窓口となった神戸(P199)</p> <p>【コラム】水とつき合う地域の知恵(P209)</p> <p>【図】輪中の断面図(P209)</p> <p>【写真】濃尾平野の西部(P209)</p> <p>【本文】三つの地域の気候の特色(P209)</p> <p>【本文】乾燥した冬と暑い夏(P223)</p> <p>【本文】強まる一極集中で高まるリスク(P230)</p> <p>【写真】仙台セタまつりで震災からの復興を願う折り鶴を贈る中学生(P234)</p> <p>【本文】東北地方の農業(P238)</p> <p>【コラム】火山と地域との共生(P259)</p> <p>【写真】有珠山と洞爺湖(P259)</p> <p>【写真】2000年の噴火(P259)</p> <p>【その他】「自然と防災班」がつくった京都府の主な災害の表(P266)</p> <p>【写真】大雨による嵐山の水害(P266)</p>	<p>【写真】東日本大震災で沿岸部をおそった津波(P144)</p> <p>【本文】地震や津波による災害(P144)</p> <p>【地図】日本周辺の主な地震災害と火山(P144)</p> <p>【コラム】地震・津波が起きるしくみ(P145)</p> <p>【その他】「釜石の奇跡」はなぜ起こったのか(P150)</p> <p>【写真】避難のようす(P150)</p> <p>【地図】端住居地区の津波浸水域(P150)</p> <p>【写真】端住居地区のようすと釜石端住居復興スタジアム(P150)</p> <p>【本文】環境問題への取り組み(P155)</p> <p>【本文】日本の電力を支えてきた中部地方(P215)</p> <p>【その他】東北絆まつり(P234)</p> <p>【写真】東日本大震災からの復興が進む市街地(P234)</p> <p>【本文】南北にのびる山地と平地(P236~237)</p> <p>【地図】東北地方の市町村別人口増加率(P242)</p> <p>【グラフ】被災した主な市町の人口の変化(P242)</p> <p>【本文】震災がもたらした急激な人口の変化(P242)</p> <p>【本文】震災で大きな影響を受けた農業・漁業(P242~243)</p> <p>【グラフ】被災した3県の水産物の水あげ量(P242)</p> <p>【本文】震災で世界にまで影響がおよんだ工業(P243)</p> <p>【写真】宮古市姉吉地区に建てられた津波記念碑(P244)</p> <p>【写真】千年希望の丘に建てられた慰霊碑の除幕式(P244)</p> <p>【写真】いのちの石碑プロジェクト(P244)</p> <p>【本文】震災を伝承していく取り組み(P244~245)</p> <p>【写真】震災の遺構として保存・公開されている荒浜地区の小学校(P245)</p> <p>【写真】震災前の荒浜地区を再現した模型を見ながら説明する元住民(P245)</p> <p>【写真】陸前高田市の中心部の復興(P245)</p> <p>【本文】災害に強い地域づくりをめざして(P245)</p> <p>【写真】玉浦西地区のまちびらきを祝ってみこしをかっこつぐ子どもたち(P245)</p> <p>【その他】新しいまちづくりをめざして(P246)</p> <p>【写真】野蒜地区とその周辺(P246)</p> <p>【写真】震災遺構として保存される旧野蒜駅のホーム(P246)</p> <p>【写真】野蒜ヶ丘に新しく開校した小学校(P246)</p> <p>【写真】野蒜ヶ丘で開催された夏祭り(P246)</p> <p>【その他】野蒜ヶ丘で自治会活動をしている佐々木さんの話(P246)</p> <p>【写真】「自然と防災班」が集めた防災パンフレットなどの資料(P266)</p> <p>【本文】課題に対する取り組みを調査し考察する(P266)</p> <p>【その他】課題に対する取り組みを調査し考察する(P267)</p> <p><small>【地図】「自然と防災班」が集めた「防災パンフレット」などの資料についていた紙製模型のマークを写した冊子(P267)</small></p> <p>【その他】すべての人々のために「京都市災害対策プラン」を立てよう！(P270)</p> <p>【その他】「自然と防災班」のまちづくりプラン(P272)</p>

発行者	一次エネルギーや再生可能エネルギーについて取り上げている項目	そのうち、原子力発電についての記述の概要
東 書	<p>【写真】 アフリカで建設が進む風力発電 (巻頭3)</p> <p>【本文】 人口増加が続く南アジア (P66-67)</p> <p>【本文】 安全で先進的な都市への課題 (P69)</p> <p>【本文】 ドイツの風力発電 (P80)</p> <p>【本文】 環境問題への取り組み (P80-81)</p> <p>【グラフ】 再生可能エネルギーによる発電量 (P81)</p> <p>【本文】 持続可能な開発に向けて (P121)</p> <p>【本文】 急で短い日本の川 (P159)</p> <p>【本文】 日本の発電方法の変化 (P171)</p> <p>【本文】 資源の活用と環境への配慮 (P171)</p> <p>【地図】 日本の主な発電所の分布 (P171)</p> <p>【写真】 火力発電所とガスタンカー (P171)</p> <p>【グラフ】 世界の主な国の発電量の内訳 (P171)</p> <p>【地図】 一人あたりのバイオマス発電量 (P177)</p> <p>【その他】 日本のエネルギーのあらし (P180-181)</p> <p>【写真】 矢沢ダムと水力発電所 (P180)</p> <p>【写真】 火力発電所 (P180)</p> <p>【写真】 原子力発電所 (P180)</p> <p>【写真】 成田国際空港の太陽電池パネル (P181)</p> <p>【写真】 風力発電施設 (P181)</p> <p>【写真】 地熱発電所 (P181)</p> <p>【写真】 バイオマス発電所 (P181)</p> <p>【本文】 火山のめぐみ (P190)</p> <p>【地図】 九州地方の主な温泉地と地熱発電所 (P190)</p> <p>【グラフ】 日本の地熱発電の地方別割合 (P190)</p> <p>【写真】 世界最大級の地熱発電所である八丁原発電所 (P191)</p> <p>【写真】 中京工業地帯 (P225)</p> <p>【本文】 豊富な水を生かした北陸の産業 (P228)</p> <p>【本文】 東京湾岸と北関東の工業地域 (P240)</p>	<p>【本文】 環境問題への取り組み (P80-81)</p> <p>地球温暖化の原因になる、温室効果ガスの排出を減らす努力も続けられており、EU加盟国では、火力や原子力にかわる、風力などの再生可能エネルギーを利用した発電も、積極的に進められています。(P80)</p> <p>【本文】 日本の発電方法の変化 (P171)</p> <p>原子力発電は、温室効果ガスを排出せず、効率良く安定して電力が得られませんが、東日本大震災での発電所の事故を受けて、原子力発電の在り方についての議論が続いています。(P171)</p> <p>【地図】 日本の主な発電所の分布 (P171)</p> <p>【グラフ】 世界の主な国の発電量の内訳 (P171)</p> <p>【本文】 日本のエネルギーのあらし</p> <p>ウランを燃料にした核分裂反応で発生する熱エネルギーを使って発生させた水蒸気で、タービンを回させて発電します。海水を冷却水として使うことや、事故が発生したときの影響を少なくするため、都市部からは離れた海岸の近くに発電所が建設されています。二酸化炭素を排出せずに効率良く安定した電力を得られますが、事故が発生した場合の被害の大きさ、放射性廃棄物の最終処分場の場所を決めることが難しい点などが課題です。(P180)</p> <p>【写真】 原子力発電所 (P180)</p>

発行者	一次エネルギーや再生可能エネルギーについて取り上げている項目	そのうち、原子力発電についての記述の概要
<p>教 出</p>	<p>【写真】海上の風力発電の施設 (P76) 【写真】太陽光発電の施設 (P76) 【本文】発電方式の見直し (P76~77) 【本文】再生可能エネルギーへの期待 (P77) 【グラフ】各国の総発電量に占める再生可能エネルギーによる発電の割合 (P77) 【写真】家畜の糞尿を利用したバイオマス発電 (P77) 【図】ヨーロッパの各国間の電力のやり取り (P77) 【コラム】原子力発電をめぐる各国の対応 (P77) 【写真】黒部ダム (P154) 【グラフ】主要国の発電量の内訳 (P167) 【地図】日本の主な発電所の分布 (P167) 【本文】簡単ではない電力の問題 (P167) 【本文】電力に関する新たな動き (P167) 【表】発電方式の特徴 (P167) 【本文】火山が集中する九州地方 (P178) 【写真】八丁原地熱発電所 (P178) 【写真】「清川だし」を利用した風力発電 (P254)</p>	<p>【本文】発電方式の見直し CO₂の排出量が少ないとされている原子力発電が各国で推進されてきました。しかし、1986年にウクライナ(当時はソ連)のチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故により、放射性物質がヨーロッパの広い範囲に飛び散り、原子力発電の安全性について関心が高まるようになりました。(P76~77) 【コラム】原子力発電をめぐる各国の対応 ヨーロッパには、フランスのように原子力発電が電力供給量の約80%を占める国がある一方で、ドイツのように原子力発電の段階的な廃止を決めた国もあります。しかし、陸続きのヨーロッパでは各国が電線が繋がれており、原子力発電の廃止を決めた国にも、フランスなどの原子力発電所がつけられた電力がやり取りされているのが現実です。(P77) 【グラフ】主要国の発電量の内訳 (P167) 【地図】日本の主な発電所の分布 (P167) 【本文】簡単ではない電力の問題 1970年代の石油危機をきっかけに原子力発電も日本の発電量の約30%を占めるまでに増えました。しかし2011年、東日本大震災で原子力発電所が深刻な事故を起こし、一時は国内全ての原子力発電所が営業運転を中止しました。事故を避け、ヨーロッパでは原子力発電の廃止を決めた国もあります。 水力発電や原子力発電の立地場所は、電力消費の多い大都市から離れた地域です。(P167) 【表】発電方式の特徴 (P167) (しくみ) ウランやプルトニウムを燃料とし、核分裂で発生する熱を利用して蒸気を発生させ、蒸気でタービンを回し、発電する。 (発電所の立地場所) 燃料を受け入れる港が必要であることや、大量の冷却水が必要とされるため、水を得やすい海岸部。(日本では法律などにより、立地場所が定められていま</p>

発行者	一次エネルギーや再生可能エネルギーについて取り上げている項目	そのうち、原子力発電についての記述の概要
<p>帝国</p>	<p>【本文】 伝統と現代の生活文化の共存 (P35) 【写真】 駐車場の屋根に設置された太陽光発電のパネル (P35) 【本文】 都市の発展と残された課題 (P55) 【写真】 中国各地で建設が進む大規模な太陽光発電施設 (P55) 【本文】 持続可能な社会を実現するための課題 (P105) 【解説】 バイオ燃料 (P117) 【本文】 生活を支える電力 (P156～157) 【地図】 主な発電所の分布 (P157) 【グラフ】 主要国の発電量の内訳 (P157) 【写真】 住宅用の太陽光発電システム (P157) 【本文】 持続可能な社会に向けて (P157) 【本文】 火山がもたらした豊かな恵み (P177) 【写真】 八丁原地熱発電所 (P177) 【写真】 大阪湾岸の工業地帯の移り変わり (P210) 【本文】 移り変わる阪神工業地帯 (P210～211) 【その他】 環境につちかわられた産業の発展のために～地場産業を生み出してきた京都の企業を例に～ (P218) 【写真】 京都の企業の太陽光発電システムが使われているメガソーラー (P218) 【本文】 雪どけ水を生かした工業と暮らし (P231) 【本文】 新たな工業の発展と環境に配慮したエネルギーの導入 (P264～265) 【写真】 風力発電所の風車群 (P264) 【本文】 雪に備える生活の工夫 (P275)</p>	<p>生活を支える電力 水資源に恵まれた日本では、かつては山地に建設されたダムの水を用いた水力発電が多かったのですが、電力消費量の増加に伴って、原油や石炭・天然ガスを燃料にした火力発電や、ウランを燃料にした原子力発電が大きな割合を占めるようになりまし。火力発電所は、電力需要の多い工業地域や大都市に近いうところに、原子力発電は冷却水の得やすい沿岸部に分布しています。 火力発電は地球温暖化を引き起こす問題などがあるとして、原子力発電が推進されてきました。しかし、2011年に起きた福島第一原子力発電所の事故をきっかけに、原子力発電の利用が見直されるようになりました。(P156～157) 【地図】 主な発電所の分布 (P157) 【グラフ】 主要国の発電量の内訳 (P157) 【本文】 新たな工業の発展と環境に配慮したエネルギーの導入 東日本大震災による福島県の原子力発電所の事故をきっかけに、東北地方では原子力発電に代わる新しいエネルギー源として、風力や地熱、太陽光、バイオマスなど、再生可能エネルギーを導入する動きが活発になっていきます。(P265)</p>

発行者	一次エネルギーや再生可能エネルギーについて取り上げている項目	そのうち、原子力発電についての記述の概要
日 文	<p>【本文】環境に配慮した資源・エネルギー政策と課題 (P67)</p> <p>【地図・グラフ】フランスの電力の輸出入とフランス・ドイツの発電方法別発電量 (P67)</p> <p>【本文】大規模で急速な開発による環境問題 (P102)</p> <p>【その他】地球温暖化を防ぐために (P104)</p> <p>【写真】南アメリカ最大の太陽光発電所 (P104)</p> <p>【地図】主な発電所の分布と主な電力会社の営業地域 (P155)</p> <p>【コラム】さまざまな再生可能エネルギー (P155)</p> <p>【写真】水力発電 (P155)</p> <p>【写真】太陽光発電 (P155)</p> <p>【写真】風力発電 (P155)</p> <p>【写真】地熱発電 (P155)</p> <p>【本文】環境問題への取り組み (P155)</p> <p>【本文】資源・エネルギーからみた日本の地域区分 (P155)</p> <p>【グラフ】日本のエネルギー供給の割合 (P155)</p> <p>【写真】八丁原地熱発電所 (P168)</p> <p>【本文】火山活動を自然のめぐみとして生かす (P168~169)</p> <p>【地図】九州地方の主な温泉・地熱発電所と火山・シラス台地の分布 (P169)</p> <p>【本文】気候と人々の生活 (P169)</p> <p>【写真】大規模な太陽光発電所 (P169)</p> <p>【本文】世界の環境首都をめざす北九州市 (P175)</p> <p>【本文】三つの地域の気候の特色 (P209)</p> <p>【本文】日本の電力を支えてきた中部地方 (P215)</p> <p>【写真】多くの観光客がおとずれる黒部ダム (P215)</p> <p>【写真】日本沿岸の風力発電所 (P237)</p> <p>【コラム】風力発電の盛んな東北地方 (P237)</p> <p>【本文】震災がもたらした急激な人口の変化 (P242)</p> <p>【本文】震災で大きな影響を受けた農業・漁業 (P242~243)</p>	<p>【本文】環境に配慮した資源・エネルギー政策と課題 現在では、ヨーロッパのエネルギーは、フランスの原子力発電や、ロシアからバイブラインで送られる石油・天然ガスにたよっています。 ドイツでは、1986年のチェルノブイリ原子力発電所の事故のあと、原子力に依存しない社会・経済のしくみを考えるうごきが始まりました。(P67) 再生可能エネルギーは値段が高く、現在でもドイツは、フランスの原子力発電所で作られた電力を大量に輸入しています。(P67) 【地図・グラフ】フランスの電力の輸出入とフランス・ドイツの発電方法別発電量 (P67)</p> <p>【地図】主な発電所の分布と電力会社の営業地域 (P155)</p> <p>【本文】環境問題への取り組み 日本では、東日本大震災で発生した福島第一原子力発電所の事故によって、エネルギー問題に対する人々の意識が大きく変わりました。(P155)</p> <p>【本文】資源・エネルギーからみた日本の地域区分 原子力発電所や風力発電所は、大都市からはなれた沿岸部に立地しています。(P155)</p> <p>【グラフ】日本のエネルギー供給の割合 (P155)</p> <p>【本文】日本の電力を支えてきた中部地方 新潟県や福井県の若狭湾の沿岸部には、多くの原子力発電所があります。</p> <p>【本文】東日本震災による福島第一原子力発電所の事故のあと、多くの発電所が運転を停止しています。(P215)</p> <p>【本文】震災がもたらした急激な人口の変化 津波や福島第一原子力発電所の事故による被災地からは、多くの人々が内陸部や仙台市のほか、他県や他地方にまで避難したり、移り住んだりしています。(P242)</p> <p>【本文】震災で大きな影響を受けた農業・漁業 原子力発電所の事故による放射性物質の風評被害で、農産物や水産物の販売が大きく落ち込みました。(P242~243)</p>

持続可能な社会づくりについて取り上げている項目

発行者

<p>【その他】 地域によりよい発展を目指して (巻頭 1-2)</p> <p>【その他】 序説 学ぶにあたって (P47)</p> <p>【コラム】 平和への道を探る朝鮮半島 (P57)</p> <p>【コラム】 「水の都」ベネツィアが沈む? (P69)</p> <p>【コラム】 和解と協調を進める南アフリカ共和国 (P87)</p> <p>【コラム】 フェアトレードの取り組み (P89)</p> <p>【コラム】 持続可能な発展への支援～サヘルの緑化への挑戦 (P91)</p> <p>【コラム】 大平原で発生する竜巻 (トルネード) に備えて (P97)</p> <p>【コラム】 二つの公用語があるカナダ (P99)</p> <p>【本文】 持続可能な社会を実現するための課題 (P105)</p> <p>【コラム】 ブラジルに渡った日系人 (P113)</p> <p>【コラム】 地球温暖化による影響と危機 (P123)</p> <p>【コラム】 注目されるアポリジナルアート (P125)</p> <p>【コラム】 災害時の帰宅困難者対策 (P151)</p> <p>【本文】 持続可能な社会に向けて (P157)</p> <p>【コラム】 南西諸島での水不足対策 (P175)</p> <p>【コラム】 公雪の街から生まれ変わった水俣市 (P181)</p> <p>【その他】 自然環境の再生から資源循環型社会へ ～工業の発展と公害をいち早く経験した福岡県北九州市を例に～ (P186)</p> <p>【コラム】 土砂災害に備えた防災教育 (P191)</p> <p>【コラム】 世界とつながる平和記念都市、広島 (P193)</p> <p>【その他】 通信網を生かした地域おこしの取り組み ～徳島県神山町や上勝町のICT活用を例に～ (P202)</p> <p>【コラム】 震災の経験を語り継ぐ神戸 (P207)</p> <p>【コラム】 近畿地方と朝鮮半島との結びつき (P209)</p>	<p>【コラム】 姫路城とその周辺の景観を守る取り組み (P213)</p> <p>【その他】 環境につちかわれた産業の発展のために ～地場産業から先端技術を生み出してきた京都の企業を例に～ (P218)</p> <p>【コラム】 御嶽山噴火の教訓を伝える火山マイスター (P223)</p> <p>【コラム】 公害の教訓を伝える三重県四日市市 (P225)</p> <p>【その他】 時代の変化に対応する産業の創出 ～新たなものづくりに挑戦を続ける静岡県浜松市を例に～ (P234)</p> <p>【コラム】 都市型の水害に備える取り組み (P239)</p> <p>【コラム】 多文化の共生を目指す大泉町 (P247)</p> <p>【その他】 都市と農村の交流の取り組み ～東京都世田谷区と群馬県川場村の「縁組協定」を例に～ (P252)</p> <p>【コラム】 津波を後世に伝える桜の木 (P257)</p> <p>【その他】 災害からの復興と生活の場の再生 ～高台に移転した岩手県宮古市田老地区を例に～ (P268)</p> <p>【コラム】 全員避難を実現した地域ぐるみの防災教育 (P273)</p> <p>【コラム】 持続可能な漁業を目指して (P279)</p> <p>【その他】 地域の多様な文化を大切にする取り組み ～自然と共に生きるアイヌの人々を例に～ (P284)</p> <p>【その他】 序説 学ぶにあたって (P285)</p> <p>【その他】 持続可能な社会に向けて考えてこと (P286)</p> <p>【本文】 各地域でみられた課題を振り返ろう (P286)</p> <p>【本文】 追究するテーマを決めよう (P287)</p> <p>【コラム】 鎌倉市のオーバーツーリズムへの取り組み (P290)</p> <p>【その他】 第3部第3章「日本の諸地域」で学んできた持続可能な社会に向けた取り組みの例 (P292)</p> <p>【本文】 構想したことを議論しよう (P293)</p> <p>【本文】 持続可能な社会を目指す一員として (P295)</p>
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>【本文】 環境保全による持続可能な社会への取り組み (P66)</p> <p>【本文】 大量生産・大量消費の生活スタイルと持続可能な社会 (P92-93)</p> <p>【本文】 大量生産・大量消費をめぐる問題 (P92-93)</p> <p>【本文】 新たな取り組み (P93)</p> <p>【その他】 持続可能な社会をつくるために (P94-95)</p> <p>【コラム】 人と環境にやさしい都市づくり (P101)</p> <p>【本文】 熱帯雨林を守る取り組み (P102-103)</p> <p>【本文】 環境に配慮した新しい取り組み (P103)</p> <p>【解説】 「3R」という取り組み (P154)</p> <p>【本文】 環境問題への取り組み (P155)</p> <p>【地図】 九州地方で持続可能な社会づくりに向けた先進的な取り組みを進めている地域 (P174)</p> <p>【本文】 世界の環境首都をめざす北九州市 (P175)</p> <p>【本文】 農産物を活用した地域活性化 (P186-187)</p> <p>【コラム】 「葉っぱビジネス」による地域活性化 (P187)</p> <p>【その他】 大阪・関西万博が開かれる大阪市の湾岸部 (P204)</p> <p>【その他】 オリンピック・パラリンピックからみる東京の変化 (P232)</p> <p>【本文】 東北地方 一持続可能な社会づくりをテーマに (P234-247)</p>	<p>【その他】 日本の諸地域をふりかえろう (P262)</p> <p>【その他】 持続可能な開発目標 (SDGs) の17の目標 (P262)</p> <p>【本文】 日本全体の課題をふりかえる (P264)</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

「別紙2-1-1」 【 オリンピック・パラリンピックの扱い】 (中学校 社会 地理的分野)

発行者	オリンピック・パラリンピックについて取り上げている項目及び記述の概要
東 書	<p>【その他】イスラム教と人々の暮らし「コーラン」では、ほかの宗教を信仰する人たちが認められており、東京オリンピックなどで多くのイスラム教徒が日本を訪れるようになる中で、イスラム教に対する正しい理解が求められています。(P70)</p> <p>【本文】世界都市・東京2020年には、夏季オリンピック・パラリンピックが東京で開催されます。(P236-237) 臨海部では再開発も進められており、オリンピック・パラリンピックをきっかけにした、いっそうの発展が期待されています。(P236-237)</p> <p>【その他】オリンピック・パラリンピックと東京 東京は、1964(昭和39年)と、2020年の二度、オリンピック・パラリンピックの開催地になりました。(P244)</p> <p>【写真】「TOKYO2020」に向けて建設が進む新国立競技場(P244)</p> <p>【写真】開発が進む東京の臨海部(P244)</p> <p>【写真】1964年の大会に合わせて開業したモノレール(P244)</p>
教 出	<p>【写真】聖火を点火する最終ランナー (P119)</p> <p>【その他】オリンピックはどこで開かれるのだろう 上の図は、夏季オリンピックの開催国・都市、下の図は、冬季のオリンピックの開催国・都市を表したものです。日本では、夏季・冬季でそれぞれ2回ずつ開催されています。(P129)</p> <p>【地図】夏季オリンピックの開催国・都市の分布 (P129)</p> <p>【地図】冬季オリンピックの開催国・都市の分布 (P129)</p> <p>【コラム】東京湾の臨海部の再開発 2018年に卸売市場が築地から豊洲へ移転したほか、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックの多くの競技会場や選手村も臨海部に建設され、臨海部は再開発によって大きく変わりました。(P235)</p> <p>【写真】臨海部の東京オリンピック・パラリンピック選手村建設現場 (P235)</p> <p>【写真】東京湾に位置する廃棄物立処分場 (P276)</p> <p>【写真】世界最大規模のスタジアムでサッカー観戦を楽しむ人々 (P108)</p>
帝 国	<p>【コラム】再利用可能な資源が眠る都市鉱山 2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピックでは、都市鉱山からメダルを作る取り組みが進められています。(P157)</p> <p>【写真】オリンピックのメダルを作るために集められた不要な携帯電話 (P157)</p> <p>【コラム】変化し続ける湾岸地域 東京2020オリンピック・パラリンピックでは会場や選手村として活用され、東京の都心と結ばれる道路などの交通網がいっそう整備されるなど、湾岸地域は多様で新しい生活や産業の場所として注目されています。(P245)</p> <p>【写真】東京2020オリンピック・パラリンピック会場予定地になっている湾岸地域 (P245)</p>
日 文	<p>【本文】国旗からみる世界 オリンピックの表彰式やサッカーのワールドカップの試合前などには国旗が掲げられます。(P6)</p> <p>【写真】オリンピックで掲げられる日本の国旗 (P6)</p> <p>【写真】2000年に開催されたシドニーオリンピックの開会式 (P110)</p> <p>【写真】「東京2020オリンピック・パラリンピック」の開会式・閉会式が行われる予定の新国立競技場 (P220)</p> <p>【その他】オリンピック・パラリンピックからみる東京の変化 東京では、2020年にオリンピック・パラリンピックが開催されます。(P232) 2020年の7-9月に東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。(P232) オリンピック・パラリンピックの開催中や開催後には、それをきっかけにして、より多くの観光客が日本をおとずれることが予想されます。(P232) オリンピック・パラリンピックの開催をきっかけに、東京では再開発が進んでいます。(P232)</p> <p>【写真】2020年に合わせて導入・開業予定の東京BRTと山手線の新駅 (P232)</p> <p>【地図】オリンピック・パラリンピックと再開発 (P232)</p> <p>【本文】札幌市の発展 1972年には、アジアで初めて冬季オリンピックが開催されました。(P253)</p>

「別紙3」【構成上の工夫】（中学校 社会 地理的分野）

項目 発行者	ア 冊子の 構成	イ 学習過程	ウ 学習活動	エ 「主体的・対話的で深い学 び」の実現に向けた工夫	オ ユニバーサルデザ インの視点	カ デジタルコンテン ツの扱い
東書	<p>全体を「世界と日 本の姿」「世界のさ まざまな地域」「日 本のさまざまな地 域」の三編で構成し ている。</p>	<p>各単元に単元全体を貫く問いである 「探究課題」と、探究課題の解決を補 助する問いである「探究のステッ プ」、1単位時間の学習のめあてであ る「学習課題」が設けられている。 ・1編と2編1・2章、3編2・3章 の終結部には、学習した知識・概念を 確認する「基礎・基本のまとめ」を設 け、定着の確認と振り返りができるよ うになっている。</p>	<p>本文や資料と関連する活動を、「み んなでチャレンジ」や「見方・考え 方」、「読み取る」などで取り上げて いる。 ・地球儀や地図帳、統計資料の活用 の仕方を学習する活動として「スキル アップ」を設け、身に付けた技能を確 認できるようにしている。</p>	<p>学習の終わりに、基礎事項を確認する「チエツ ク」と、要約や説明などをとする「トライ」の2段 階の問いを設けている。 ・小集団での参加型学習である「みんなであ るチャレンジ」を、課題追究のポイントとな る1単位時間の学習や「導入の活動」「ま とめの活動」などに設けている。 ・本文ページなどに、「見方・考え方コー ナー」を設定し、学習内容の理解に見 方・考え方を動かせる場面を設けてい る。</p>	<p>裏表紙に、全ての生徒の色覚特 性に適応するようにデザインして いることが示されている。 ・裏表紙に、見やすく読みまちが えにくいユニバーサルデザイン フォントを採用していることが示 されている。</p>	<p>・Dマークや二次元コードが 付いている部分では、教科書 5ページに掲載した二次元 コード・URLなどからリン クすることで、歴史や公民の 関連する紙面や、他教科の紙 面を確認できるようにしてい る。</p>
教出	<p>全体を「世界と日 本の姿」「世界のさ まざまな地域」「日 本のさまざまな地 域」の三編で 構成している。</p>	<p>単位時間の学習のめあてである「学 習課題」が設けられている。 ・各時間の学習への導入資料や追究し ていくヒントになるような資料を、 「LOOK！」という解説文とともに 示している。 ・一部の内容のまとめと表現」の「学 習のまとめと表現」のページを設けて いる。</p>	<p>地理の基礎的・本格的な技能の習得 を図るために、本文の流れに即して 「読み解こう」のコーナーを設けてい る。 ・本文の学習から興味や関心を広げて いくコラム「地理の窓」を設けてい る。 ・学習課題と対応させた「確認」と 「表現」を設けている。</p>	<p>章や節などの末尾に、「学習のまとめと表現」 のページを設けている。 ・設定されたテーマについて自分なりの言葉で説 明する「表現しよう」やまとめた意見について互 いに話し合う「意見を交換しよう」を設けてい る。 ・巻頭4ページに、中学校社会科地理的分野にお ける「地理的な見方・考え方」を確認するページ を設けている。</p>	<p>裏表紙に、色覚の個人差を問わ ず、より多くの人に見やすい方 向ユニバーサルデザインに配慮 していることが示されている。 ・裏表紙に、見やすく読みまちが えにくいユニバーサルデザイ ンフォントを使用していることが示 されている。</p>	<p>・教科書とウェブサイトをリ ンクさせ、学習に役立つさま ざまな情報を得ることができ る「まなびリンク」を設け、 学習に役立つさまざまな情報 を、ウェブサイトで届けるこ とができるようになっている。</p>
帝国	<p>全体を「世界と日 本の地域構成」「世 界のさまざまな地 域」「日本のさま ざまな地域」の三編 で構成している。</p>	<p>「章の問い」「節の問い」、学習課 題」を設けている。 ・「章・節・各本文ページの末尾に「章 （節）の学習を振り返ろう」、「確認し よう」、「説明しよう」を設けている。</p>	<p>章・節の末尾に「章（節）の学習を 振り返ろう」を設けて、「見方・考え 方」を動かさせた、「章（節）の問い」 の答えに対する論理的な説明や、地域 の特色に対する多面的・多角的な考察 を促す活動を設定している。 ・地理を学習するうえで必要な、基礎 的スキルを身に付けるためのコラムとし て「技能をみがく」を設けている。</p>	<p>見通しをもつ場面として「学習課題」を設けてい る。 ・振り返りの場面として「確認しよう」、「説明しよ う」を設けている。 ・導入資料には、実社会の人々の具体的な話を紹 介するコラムとして「声」を設けている。 ・持続可能な社会をつくるための参考になる取り 組を紹介するコラムとして「未来に向けて」、特 設ページとして「地域の在り方を考える」を設けて いる。 ・巻頭7で「地理的な見方・考え方について」を 設けている。</p>	<p>裏表紙に、特別支援教育やユニ バーサルデザインの観点から、色 覚特性に配慮した色づかいとなる よう工夫していることが示されて いる。 ・裏表紙に、見やすく間違えにく いユニバーサルデザインフォント を採用していることが示されてい る。</p>	<p>・二次元コードの利用で、教 科書に掲載している資料の一 部を、タブレットパソコンな どで閲覧できるようにしてい る。 ・各章・節の二次元コードで は、学習内容に関連する動画 は、学習内容「学習を振り返 ろう」では、知識を確認する 問題の解答を閲覧できるよう になっている。</p>
日文	<p>全体を「世界と日 本の地域構成」「世 界のさまざまな地 域」「日本のさま ざまな地域」の三編 で構成している。</p>	<p>①導入資料→②「学習課題」→③ 「見方・考え方」→④「深めよう」→ ⑤「確認」を基本構造としている。州や 地方を振り返る作業を通して、地域的 特色をより深く捉えるための「学習の まとめ」を設けている。</p>	<p>「見方・考え方」を動かさせながら考 える問いである「深めよう」を示して いる。 ・側注欄には学習課題に対応した「確 認」を設け、基礎的な知識・技能の確 実な定着を企図した学習活動を設定し ている。</p>	<p>第2編第2章、第3編第3章の各節末に、その 節で学習したことを生かして生徒が自分で考えた 対話したりする具体的な問いや活動を提示する 「チャレンジ地理」や「アクティビティ」を設け ている。 ・巻頭Ⅱ・Ⅲで、「地理的な見方・考え方」につ いてイラストと問いを用いて示している。 ・学習課題とともに、その見開きで主に動かせた 「見方・考え方」の例を示している。</p>	<p>裏表紙に、見やすく読みまちが えにくいユニバーサルデザイ ンフォントを採用していることが示 されている。 ・裏表紙に、この教科書はカラ ーユニバーサルデザインに配慮し ていることが示されている。</p>	<p>・デジタルマークを付けた箇 所では、ICTを活用して学 習を深めることができるよ う、Webページの内容を ツが閲覧できるようにしてい る。</p>

